

楚辞「九懷」訳注（下）

上原 尉暢

漢代楚辞作品研究会

はじめに

小稿は「楚辞「九懷」訳注（上）」（『東北大学中国語学文学論集』第27号、2022年）を承けて、王褒（生卒年不明、漢代宣帝期の人物）「九懷」の「尊嘉」・「薈英」・「思忠」・「陶壅」・「株昭」及び乱辞についての訳注を収める。前稿と同じく、上原尉暢・狩野雄・塚本信也・矢田尚子をスタッフとする科学研究費補助金基盤研究（C）（一般）18K00348「漢代楚辞作品の多角的研究—文学・思想・文化研究資料としての再評価をめざして—」の研究成果の一部となっている。訳注本文の執筆は上原が担当したが、上掲した他の研究スタッフによる検討を経たものであること、これも前稿に倣うものである。

訳注についての凡例を、以下に掲げる。

凡例

○底本には洪興祖撰、白化文等点校『楚辞補注』（中華書局、2002年）を用い、四部叢刊本『楚辞補注』及び明万曆一四年馮紹祖校刊本王逸『楚辞章句』（台北・藝文印書館、1974年）を参照した。注釈内の引用については、経書は『十三経注疏附校勘記』（台北・藝文印書館影印本、1965年）に、正史は中華書局排印本に、『大広益会玉篇』・『急就篇』・『新序』・『尚書大伝』・『広弘明集』・『古文苑』・『嵇中散集』・『陸士龍文集』・『梁江文通文集』・『箋注陶淵明集』は四部叢刊本に、『広雅』は王念孫『広雅疏証』（叢書集成初編、商務印書館、1939年）に、『荘子』は郭慶藩撰、王孝魚点校『荘子集釈』（中華書局、1961年）に、『荀子』は王先謙撰、沈嘯寰・王星賢点校『荀子集解』（中華書局、1988年）に、『韓非子』は王先謙撰、鍾哲点校『韓非子集解』（中華書局、1998年）に、『管子』は黎翔鳳撰、梁運華整理『管子校注』（中華書局、2004年）に、『淮南子』は劉文典撰、馮逸・喬華点校『淮南鴻烈集解』（中華書局、1989年）に、『説苑』は向宗魯校証『説苑校証』（中華書局、1987年）に、『山海経』は袁柯『山海経校注』（上海古籍出版社、1980年）に、『論衡』は黄暉撰『論衡校釈』（中華書局、1990年）に、『文選』は、李善注本は尤袤本（台北・石門図書有限公司、1976年）に、五臣注本は『足利学校蔵宋刊明州本六臣注文選』（人民文学出版社、2008年）に、『玉台新詠』は吳兆宜注、程琰刪補、穆克宏点校『玉台新詠箋注』（中華書局、1985年）に、

『樂府詩集』は中華書局排印本（1979年）に、『藝文類聚』は汪紹楹校『藝文類聚』（上海古籍出版社、1982年）に、王念孫『讀書雜誌』は北京市中国書店排印本（1985年）に依拠した。

○解釈に際して『楚辭補注』（以下『補注』と略記）以外に頻繁に参照したものとしては、聞一多『楚辭校補』（『聞一多全集』5、湖北人民出版社、1993年。以下『校補』と略記）、David Hawkes《The Songs of the south : an ancient Chinese anthology of poems》（Penguin、1985、1985年。以下《The songs》と略記）、傅錫壬『新訳楚辭讀本』（三民書局、1976年。以下『讀本』と略記）、梅桐生『楚辭今訳』（貴州人民出版社、2000年。以下『今訳』と略記）、湯炳正・李大明・李誠・熊良智『楚辭今注』（上海古籍出版社、1996年。以下『今注』と略記）、黄靈庚『楚辭章句疏証（増訂本）』（上海古籍出版社、2018年。以下『疏証』と略記する。）などがある。また特に掲出はしないが、国内外の既存の訳注書・研究書は大いに参照した。

○押韻は羅常培・周祖謨『漢魏晉南北朝韻部演變研究』第一分冊（科学出版社、1958年）所収の「兩漢詩文韻譜」に基づいた。双声・疊韻語については王力主編『王力古漢語字典』（中華書局、2000年）を参照した。

○作品本文とその書き下し文は太字で示して句ごとに番号を振り、現代日本語訳と注釈を付けた。なお、紙幅に限りがあるため、王逸注は訓読のみとした。

「尊嘉」

題解

嘉善なる者を尊崇する、の意。《The Songs》も“Honouring the Good”と訳している。内容は晩春三月、世の混濁に愛想を尽かした主人公が君のもとを去り、穢れ無き姿を目指して河川を溯る。目的地に到達したものの、故郷への思いに引きずられ、根無しのの浮き草に身を重ねて悲嘆にくれるところで締め括られる。楚辭「九章」涉江・哀郢などの河川での彷徨を主題とした作品を強く意識するものであろう。

1 季春兮陽陽 季春は陽陽として

王逸注 三月溫和、氣清明也。（三月は温和にして、気は清明なり。）

2 列草兮成行 列草 行を成す

王逸注 百卉垂條、吐榮華也。（百卉 條を垂れ、榮華を吐くなり。）

通釈 晩春三月は、暖かく澄みきっていて、数多の草が行列をなしている。

陽陽 王逸注に拠れば温和にして清明なるさま。

3 余悲兮蘭悴 余は蘭の悴え

王逸注 哀彼香草、獨隕零也。（彼の香草の、独り隕零するを哀しむなり。）

4 委積兮從横 委積せられて從横するを悲しむ

王逸注 枝條摧折、傷根莖也。（枝條摧折し、根莖を傷むるなり）

通釈 私は蘭がしおれ、積み重ねられて無秩序になっているのを悲しむ。

蘭悴 「蘭」は楚辭に頻出する香草の一つ。「離騷」に「扈江離與闞芷兮、纫秋蘭以爲佩」。「悴」、底本は「生」に作るが、王逸の「獨隕零也」とする内容と齟齬する。ここでは『補

注』に「一作悴」とあることを踏まえた『疏証』の見解に拠って改める。『校補』は「疑「生」當爲「芷」、字之誤也。此以芷缺損成「止」、與「生」形近、遂改爲生」と述べる。
委積 積み重ねること。楚辞「九章」懷沙に「材樸委積兮、莫知余之所有」とある。
從横「縦横」に同じ。縦横に連なって混乱するさま。宋玉「高唐賦」（『文選』卷十九）に「巖岬參差、從横相迫」、楚辞「七諫」沈江に「不開寤而難道兮、不別横之與縦」とある。

5 江離兮遺捐 江離は遺捐せられて

王逸注 忠正之士、棄山林也。（忠正の士は、山林に棄てらるるなり。）

6 辛夷兮擠臧 辛夷は擠臧せらる

王逸注 仁智之士、抑沈沒也。（仁智の士、抑えて沈没せらるるなり。）

通釈 江離は捨てられて、コブシは排除され覆い隠される。

江離 楚辞の主人公が身につける香草の一つ。楚辞「離騷」に「扈江離與辟芷兮、紉秋蘭以爲佩」、
「七諫」怨思に「江離棄於窮巷兮、蒺藜蔓乎東廂」とある。

遺捐 「捐棄」に同じ。楚辞「九懷」株昭に「瓦礫進寶兮、捐弃隋和」とある。

辛夷 コブシ。香木の一つ。楚辞「九章」涉江に「露申辛夷、死林薄兮」とある。

擠臧 取り除かれ隠されること。『補注』に「擠、子雞切、排也。臧、音藏、匿也」とある。

7 伊思兮往古 伊れ往古を思えば

王逸注 惟念前世、諸賢俊也。（惟れ前世の、諸の賢俊を念うなり。）

8 亦多兮遭殃 亦た殃いに遭うもの多し

王逸注 仁義遇罰、禍及身也。（仁義罰に遇い、禍い身に及ぶなり。）

通釈 古を思い起こせば、災難に遭遇した人々は数多い。

往古 昔。いにしえ。楚辞「七諫」沈江に「惟往古之得失兮、覽私微之所傷」とある。

遭殃 災難に見舞われること。楚辞「離騷」の「夏桀之常違兮、乃遂焉而逢殃」、「九歎」憂苦の「悲余心之惛惛兮、哀故邦之逢殃」とある「逢殃」と同じ。

9 伍胥兮浮江 伍胥は江に浮かび

王逸注 吳王棄之於江濱也。（吳王 之を江浜に棄つるなり。）

10 屈子兮沈湘 屈子は湘に沈む

王逸注 懷沙負石、赴汨淵也。（沙を懷き石を負い、汨淵に赴くなり。）

通釈 伍子胥はその身を長江に浮かべられ、屈原は湘水に身を沈める。

伍胥 伍子胥のこと。吳王夫差の参謀として活躍したが、最後は仲違いし自害して果てた。死体は川に流され、人々が憐れみその祠を作ったという。そのことについては『史記』卷六六・伍子胥列伝や『吳越春秋』・『越絶書』に詳しい。楚辞「九章」涉江に「忠不必用兮、賢不必以。伍子逢殃兮、比干菹醢」とある。

浮江 伍子胥の遺体が長江に流されたことを言う。『史記』卷六六・伍子胥列伝に「（伍子胥）乃自剄死。吳王聞之大怒、乃取子胥尸盛以鴟夷革、浮之江中」、また楚辞「九章」悲回風に「浮江淮而入海兮、從子胥而自適」とある。

屈子 屈原のこと。「子」は師に対する尊称。楚辞「九思」遭厄に「悼屈子兮遭厄、沈王躬兮湘汨」とある。

沈湘 湘水に入水すること。楚辞「九章」惜往日に「臨沅湘之玄淵兮、遂自忍而沈流」とある。

11 運余兮念茲 運^{めぐ}らして余茲^{おも}れを念^{おも}えば

王逸注 轉思念此、志煩冤也。（転じて此れを思念すれば、志煩冤たるなり。）

12 心内兮懷傷 心内 傷^くみを懷^くく

王逸注 腸中惻痛、摧肝肺也。（腸中惻痛して、肝肺を摧^{くだ}くなり。）

通釈 繰り返し私はこのことを考えると、心中に痛みを覚える。

押韻 陽韻平声（陽・行・横・臧・殃・湘・傷）。

運余 「運」は王逸の「轉」に通じ、繰り返すこと。『校補』は王逸の内容を勘案して、「余」字の下に「思」字が脱している可能性を指摘する（「運余思兮念茲」）。『今注』はこの部分は「招魂」の「汨吾南征」等の句型と同じく、副詞を主語の前に置く句型であるとす

る。

心内 内心。心中。楚辞「九懷」株昭に「悲哉於嗟兮、心内切磋」とある。

懷傷 心中に傷みを抱く。漢武帝劉徹「悼李夫人賦」（『漢書』卷九七上・外戚傳上）に「慘鬱鬱其蕪穢兮、隱處幽而懷傷」とある。

13 望淮兮沛沛 淮の沛沛たるを望^まみ

王逸注 臨水恐慄、畏禍患也。（水に臨んで恐慄し、禍患を畏るるなり。）

14 濱流兮側逝 流れに濱^{ひん}して側^{かく}れ逝^くく

王逸注 意欲隨水、而隱遁也。（意 水に随いて、隱遁せんと欲するなり。）

通釈 淮水が豊かに流れゆく様子を遠く望んで、流れに沿って身を隠す。

淮 淮水、淮河のこと。10 句目「浮江」の項で挙げた楚辞「九章」悲回風にも「浮江淮而入海兮、從子胥而自適」とある。

濱流 「濱」は眼前に臨む、沿うこと。『史記』卷一二九・貨殖列伝に「鄒魯濱洙泗、猶有周公遺風」とある。

側逝 「側」字は底本では「則」に作るが、文意が通じがたいので、『校補』に拠って改める。身を隠すの意。楚辞「惜誦」に「設張闢以娛君兮、願側身而無所」、「七諫」哀命に「傷離散之交亂兮、遂側身而既遠」とある。

15 榜舫兮下流 舫を榜^かいで下流^しし

王逸注 乘舟順水、游海濱也。（舟に乗りて水に順い、海浜に遊ぶなり。）

16 東注兮礚礚 東に注^かぐこと礚礚^{かいかい}たり

王逸注 濤波踊躍、多險難也。（濤波踊躍して、險難多きなり。）

通釈 舟を漕いで流れを下れば、河水は東に注ぎ、ゴロゴロとぶつかり合う音が激しい。

榜舫 船をこぎ進めること。『補注』に「榜音謗、進船也。舫音方、併船也」とある。

下流 流れを下っていくこと。楚辞「九章」惜往日に「乘汜淪以下流兮、無舟楫而自備」。「七諫」沈江に「將方舟而下流兮、冀幸君之發矇」とある。

礚礚 水や石がぶつかり合うさまを表すオノマトペ的疊語。楚辞「九章」悲回風に「憚涌湍之礚礚兮、聽波聲之洶洶」、前漢・司馬相如「子虛賦」（『史記』卷一一七・司馬相如列伝）に「水蟲駭、波鴻沸、涌泉起、奔揚會、礚石相擊、硠硠礚礚、若雷霆之聲、聞乎數百里之外」とある。

17 蛟龍兮導引 蛟龍は導引^しし

王逸注 蚪螭水禽、馳在前也。（蚪螭水禽、馳せて前に在るなり。）

18 文魚兮上瀨 文魚は瀨を上る

王逸注 臣鱗扶己、渡涌湍也。（臣鱗 己を扶えて、涌湍を渡るなり。）

通釈 蛟竜は私を先導し、文様のある魚は急流を駆け上がる。

蛟龍 みずちや竜。楚辞「離騷」に「麾蛟龍使梁津兮、詔西皇使涉予」とあるなど、楚辞では頻出する。

導引 王逸注が「馳在前」と言うように、前方にあつて先駆けとなること。

文魚 美しい模様がある魚。『山海経』中山経・中次八経に「荆山之首曰景山。……睢水出焉、東南流注于江、其中多丹粟、多文魚」、郭璞注に「有斑彩也」とある。また楚辞「九歌」河伯に「靈何爲兮水中、乘白鼈兮逐文魚」とある。

上瀨 急流の上に乗ること。西晋・左思「吳都賦」（『文選』巻五）に「汨乘流以碎宕、翼颺風之颺颺。直衝濤而上瀨、常沛沛以悠悠」とある。

19 抽蒲兮陳坐 蒲を抽きて坐に陳べ

王逸注 拔草爲席、處薄單也。（草を抜きて席と爲し、薄単に処るなり。）

20 援芙蓉兮爲蓋 芙蓉を援きて蓋と爲す

王逸注 引取荷華、以覆身也。（荷華を引き取りて、以て身を覆うなり。）

通釈 蒲の草を抜いて船の座席に敷き並べ、蓮の花びらを引き抜いて舟の蔽いとする。

抽蒲 がまを引き抜く。「蒲」は「芙蓉」同様、岸辺に生える水草。「蒲」と「芙蓉」を並称する先行例としては、『詩経』陳風・澤陂に「彼澤之陂、有蒲與荷」、毛伝に「荷、芙蓉也」、鄭箋に「蒲、滑柔之物。芙蓉之莖曰荷、生而偁大」とある。

援芙蓉 「芙蓉」を引き抜くこと。「芙蓉」は「荷」、すなわちハス。「芙蓉」とも書く。『爾雅』釋草に「荷、芙蓉」、郭璞注に「（芙蓉）別名芙蓉、江東呼荷」とある。また魏・曹植「洛神賦」（『文選』巻十九）に「遠而望之、皎若太陽升朝霞、迫而察之、灼若芙蓉出淥波」とある。『校補』は「芙蓉」字について、二字ではリズムが崩れること、また『補注』が「一云、援英兮爲蓋」と挙げるのに依拠して、「英」字の一字にすべきとする。しかし、『疏証』も指摘するように、「芙蓉」「荷」を「蓋」に仕立てる例は「九歎」逢紛に「芙蓉蓋而菱華車兮」とあること、「蒲」と「荷」（「芙蓉」）を并挙する例が『詩経』にあることより、ここでは底本に従う。

21 水躍兮余旌 水は余が旌に躍り

王逸注 風波動我、搖旗旛也。（風波 我を動かし、旗旛を揺らすなり。）

22 繼以兮微蔡 繼ぐに微蔡を以てす

王逸注 續以草芥、入己船也。（續ぐに草芥を以て、己の船に入るなり。）

通釈 水は私の旗に飛び上がり、小さな草がそれに続いて飛び込んでくる。

水躍 水がおどりあがる、という擬人法的表現。前漢・司馬相如「上林賦」（『史記』巻一一七・司馬相如列伝）に「其南則隆冬生長、踊水躍波」とあるのも参照。

微蔡 「蔡」は『補注』が「蔡、艸也」というように、取るに足りない小さな雑草の類。

23 雲旗兮電驚 雲旗は雷のごとく驚し

王逸注 遂乘風電、驅橫奔也。（遂に風電に乗り、駆けて横奔するなり。）

24 儵忽兮容裔 儵忽として容裔たり

王逸注 往來亟疾、若鬼神也。（往来すること亟やかに疾く、鬼神の若きなり。）

通釈 雲旗は雷のように疾駆し、船は波頭を上下しながらあつという間に進む。

押韻 祭部去声（沛、逝、礧・瀨・蓋・蔡・裔）

雲旗 雲の旗。雲でできた旗、もしくは熊や虎などが画かれてその図柄が雲のように見える旗、さらに雲の高さまで至る旗など、諸説ある。楚辞「離騷」に「駕八龍之婉婉兮、載雲旗之委蛇」、「九歌・東君」に「駕龍輶兮乘雷、載雲旗兮委蛇」、王逸注に「言日以龍爲車輶、乘雷而行、以雲爲旌旗、委蛇而長」とある。

電驚 稲妻のごとく疾駆するさま。後漢・班固「東都賦」（『文選』卷一）に「輕車霆激、騁騎電驚」、呂向注に「霆激電驚、言疾也」とある。

儻忽 束の間にすばやく行われるさま。楚辞「九章」悲回風に「據青冥而攄虹兮、遂儻忽而捫天」、「九弁」に「願寄言夫流星兮、羌儻忽而難當」とある。

容裔 船が波に揺られて上下しながら進むさま。後漢・張衡「東京賦」（『文選』卷三）に「建辰旒之太常、紛焱悠以容裔」、薛綜注に「容裔、高低之貌」、同「南都賦」（『文選』卷四）に「汰澆灑兮船容裔、陽侯澆兮掩鳧鷖」、呂向注に「容裔、船行貌」とある。

25 河伯兮開門 河伯 門を開き

王逸注 水君俟望、開府寺也。（水君俟ち望み、府寺を開くなり。）

26 迎余兮歡欣 余を迎えて歡欣す

王逸注 喜笑迎己、愛我善也。（喜笑して己を迎えて、我の善を愛するなり。）

通釈 河伯は彼の住まいの門を開き、私を出迎え歓迎してくれる。

河伯 伝説上の黄河の神。『莊子』秋水篇に「於是焉、河伯欣然自喜、以天下之美爲盡在己」とあり、唐・成玄英疏に「河伯、河神也。姓馮、名夷、華陰潼堤郷人、得水仙之道」とある。また楚辞「九歌」に「河伯」篇があり、「天問」に「胡射夫河伯、而妻彼雒嬪」とある。

歡欣 歡喜にひたること。『荀子』礼論篇に「故人之歡欣和合之時、則夫忠臣孝子亦憚詭而有所至矣」、後漢・傅毅「舞賦」（『文選』卷十七）に「鄭衛之樂、所以娛密坐接歡欣也」とある。

27 顧念兮舊都 顧みて旧都を念い

王逸注 還視楚國、思郢城也。（還って楚国を視て、郢城を思うなり。）

28 懷恨兮艱難 恨みを懐きて艱難す

王逸注 抱念悲恨、常欲還也。（悲恨を抱念して、常に還らんと欲するなり。）

通釈 振り返ってかつての都を思いやり、恨みを懐いてとてもつらい。

顧念 振り返りみて、未練がましく思い悩むこと。『漢書』卷九七・外戚傳上・孝武李夫人之条に「上所以攀攀顧念我者、乃以平生容貌也」とある。

舊都 楚辞「離騷」の「忽臨睨夫舊郷」とある「舊郷」に同じく、かつていた楚の都を指す。前漢・揚雄「反離騷」（『漢書』卷八七上・揚雄伝上）に「終回覆於舊都兮、何必湘淵與澗瀨」、後漢・班彪「北征賦」（『文選』卷九）に「紛吾去此舊都兮、駢遲遲以歷茲」とある。

懷恨 心に怨恨を抱くこと。後漢・王充『論衡』書虚篇に「屈原懷恨、自投湘江、湘江不爲濤」、魏・嵇康「卜疑」（『嵇中散集』卷三）に「將慷慨以爲壯、感慨以爲亮、上千萬乘、下凌將相、尊嚴其容、高自矯抗、常如失職、懷恨怏怏乎」とある。

艱難 天のもたらした辛く悩ましいこと。『詩經』小雅「白華」に「天步艱難、之子不猶」、大雅「抑」に「天方艱難、曰喪厥國」とある。ここでは動詞または形容詞的用法として解釈す

る。

29 竊哀兮浮萍 竊かに哀しむ浮萍の

王逸注 自比如蘋、生水瀕也。（自ら比するに蘋の、水瀕に生じるが如きなり。）

30 汎淫兮無根 汎淫して根無きを

王逸注 隨水浮游、乍東西也。（水に随い浮游して、乍ち東西するなり。）

通釈 浮き草が根も無くゆらゆら水辺に漂うさまを、人知れず哀しむ。

押韻 真部（門・欣・根）元部（難）合韻。

竊哀 「竊悲」に同じ。人知れず歎き哀しむこと。「九弁」に「竊悲夫蕙華之曾敷兮、紛旖旎乎都房」とある。

浮萍 浮き草。後世、各地を漂泊しさまよう人生を象徴するものとして用いられる。

汎淫 水面をゆらゆらとただようさま。前漢・司馬相如「上林賦」（『史記』卷一一七・司馬相如列伝）に「（鳥）汎淫泛濫、隨風澹淡、與波搖蕩、掩薄草渚」とある。

無根 根が無く、行方が定まらぬこと。「古詩」（『藝文類聚』卷八二・草部・萍）に「泛泛江漢萍、漂蕩水無根」、西晋・傅玄「明月篇」（『玉台新詠』卷二）に「浮萍無本根、非水將何依、憂喜更相接、樂極還自悲」とある。

「蕃英」

題解

《The Songs》が“Stored Blossoms”と訳すように、花びらを蓄える、の意。内容は、前半は秋になり自然が物寂しさを増す様子を描き、さらに「唐虞」のような名君が不在であることを理由に、主人公が現世から天上への離脱を試みる様子を叙述する。しかし旧邦への懸念は拭い去りがたく、再び詮無き愁いを抱える、というところで締め括られる。全体的には「九懷」作品全体に通底する「遠遊」文学の枠組みに、「九弁」等の「悲秋」の文学のモチーフを取り込んだ作品と見なせる。

1 秋風兮蕭蕭 秋風蕭蕭として

王逸注 陰氣用事、天政急也。（陰気は事を用い、天政急なり。）

2 舒芳兮振條 芳りを舒べ條を振るう

王逸注 動搖百草、使芳熟也。（百草を動揺し、芳をして熟ならしむるなり。）

通釈 秋風はさわさわとものさびしく吹き、木々の香りを辺りに広げ枝を震わせる。

秋風兮蕭蕭 「蕭蕭」は風がものさびしく吹きつけるさま。楚辞「九弁」の「悲哉、秋之爲氣也、蕭瑟兮、草木搖落而變衰」の「蕭瑟」と同系統の語。荊軻「歌」（『史記』卷八六・刺客列伝）に「風蕭蕭兮易水寒、壯士一去兮不復還」、楚辞「九歌」山鬼に「風颯颯兮木蕭蕭、思公子兮徒離憂」、王褒「洞簫賦」（『文選』卷十七）に「翔風蕭蕭而逕其末兮、迴江流川而漑其山」とある。また「九歎」逢紛の「白露紛以塗塗兮、秋風瀏以蕭蕭」はこの句を意識した措辞であろう。

舒芳 香りを広く拡散すること。魏・應瑒「竦迷迭賦」（『藝文類聚』卷八一・菓香部部・迷迭）に「舒芳香之酷烈、乘清風以徘徊」、東晋・孫綽「望海賦」（『藝文類聚』卷八・水部・海水）に「青甲芬飈以微扇、玄木杳眇以舒芳」とある。

振條 枝を動かし震わせること。西晋・潘岳「寡婦賦」（『文選』卷十六）に「孤鳥嚶兮悲鳴、長松萎兮振柯」、李善注に「楚辞曰、秋風兮蕭蕭、舒芳兮振條。廣雅曰、振、動也」とあり、また劉宋・謝惠連「七月七日夜詠牛女」（『文選』卷三十）に「團團滿葉露、析析振條

風」とある。

3 微霜兮眇眇 微霜 眇 眇として

王逸注 霜凝微薄、寒深酷也。（霜凝ること微薄にして、寒さ深酷なり。）

4 病殍兮鳴蜩 鳴蜩を病殍せしむ

王逸注 飛蟬卷曲、而寂默也。（飛蟬卷曲して、寂默するなり。）

通釈 うっすらと降りた霜は遠く広がり、そのせいでミンミンゼミは病んで早死にしてしまう。

微霜 うっすらと降りた霜。楚辞作品の習用語。楚辞「九章」惜往日に「何芳草之早殍兮、微霜降而下戒」、「遠遊」に「微霜降而下淪兮、悼芳草之先零」、「七諫」自悲に「何青雲之流瀾兮、微霜降之矇矇」とある。

眇眇 底本は「眇眇」に作る。王逸注に拠れば寒さが深刻であるさまを表すが、それでは主語である「微霜」と齟齬を来す。《The Songs》は“fine and light”と訳し、『今注』は「渺渺」と同じで、「此指初霜微薄之状」とするも文脈上の違和感が生じるのは否めない。ここでは『疏証』に従って「眇眇」に改める。『疏証』に拠れば「遠貌」、すなわち霜が遠くまで広がるさまを表す。

病殍 病気になる早死にしてしまうこと。南齊・王融「法樂辞」其五（『広弘明集』卷三十）に「春枝多病夭、秋葉少欣榮」、梁・江淹「山中楚辞」六首之四（『江醴陵集』卷六）に「信於邑兮白露、方夭病兮秋蘭」とある。

鳴蜩 鳴く蟬。『詩経』小雅「小弁」に「菀彼柳斯、鳴蜩嘒嘒」、楚辞「九懷」危俊に「林不容兮鳴蜩、余何留兮中州」とある。

5 玄鳥兮辭歸 玄鳥は辞し帰り

王逸注 燕將入海、化爲蛤也。（燕將に海に入りて、化して蛤に為らんとするなり。）

6 飛翔兮靈丘 靈丘に飛翔す

王逸注 悲鳴神山、奮羽翼也。（神山に悲鳴し、羽翼を奮うなり。）

通釈 つばくろは別れを告げて帰って行き、靈丘へと飛び去っていく。

玄鳥 つばめ。「玄鳥」という語は、『詩経』や楚辞では殷の創世神話中の鳥として用いられる。『詩経』商頌「玄鳥」に「天命玄鳥、降而生商」、毛伝に「玄鳥、𪗇也」とある。また楚辞「天問」に「簡狄在台譽何宜、玄鳥致貽女何喜」、「九章」思美人に「高辛之靈盛兮、遭玄鳥而致詒」とある。

辭歸 別れを告げて帰る。楚辞「九弁」に「燕翩翩其辭歸兮、蟬寂漠而無聲」とある。

靈丘 神仙の住む靈妙なる丘。後漢・班昭「大雀賦」（『藝文類聚』卷九二・鳥部・雀）に「嘉大雀之所集、生崑崙之靈丘」とある。

7 望谿兮滃鬱 谿の滃鬱たるを望むに

王逸注 川谷吐氣、雲闇昧也。（川谷は氣を吐き、雲は闇昧なり。）

8 熊羆兮咆嘯 熊羆咆嘯す

王逸注 猛獸應秋、將害賊也。（猛獸は秋に応じ、將に害賊せんとするなり。）

通釈 雲が鬱蒼と広がる谿谷を望むと、熊やヒグマが吼えている。

滃鬱 前漢・息夫躬「絶命辞」（『漢書』卷四五・息夫躬伝）に「玄雲泱鬱、將安歸兮、鷹隼横厲、鸞徘徊兮」（唐・顔師古注「泱鬱、盛貌」）とある「泱鬱」と同系統の語。雲が瀰漫す

るさまを表す双声語。楚辞「九懷」昭世に「覽舊邦兮滃鬱、余安能兮久居」とある。

熊羆兮咆 熊や羆といった猛獣が吠え叫ぶ様子。楚辞「招隱士」に「虎豹鬪兮熊羆咆、禽獸駭兮亡其曹」とある。「咆」は前掲「招隱士」の「熊羆咆」の「咆」字に通じるもの。吼え叫ぶ様子を表す。「咆」は『補注』に「咆、音吼」とあり、「羆」は『左伝』襄公十四年に「狐狸所居、豺狼所羆」とある。

9 唐虞兮不存 唐虞 存せず

王逸注 堯舜已過、難追逐也。（堯舜已に過ぐれば、追逐し難きなり。）

10 何故兮久留 何故ぞ久しく留まらん

王逸注 宜更求君、之他國也。（宜しく更めて君を求め、他国に之くべきなり。）

通釈 すでに堯舜はいないなら、どうしてここに長く留まっていられよう。

押韻 幽部平声（蕭・條・蝸・丘・噪・留）。

唐虞 伝説の帝堯と帝舜。楚辞「七諫」怨世に「高陽無故而委塵兮、唐虞點灼而毀議」とある。

久留 長く身をその場に留めること。楚辞「遠遊」に「春秋忽其不淹兮、奚久留此故居」とある。

11 臨淵兮汪洋 淵の汪洋たるを臨んで

王逸注 瞻望大川、廣無極也。（大川を瞻望すれば、広きこと極まり無きなり。）

12 顧林兮忽荒 林の忽荒たるを顧みる

王逸注 回視喬木、與山薄也。（喬木と、山の薄きとを回視するなり。）

通釈 勢いよく広がる淵を下に臨みみて、振り返れば林はぼんやりと霞んでいる。

臨淵 高みに登って深い淵を臨むこと。『詩経』小雅「小旻」に「戰戰兢兢、如臨深淵、如履薄冰」、楚辞「九章」惜往日に「臨沅湘之玄淵兮、遂自忍而沈流」、前漢・揚雄「甘泉賦」（『漢書』卷八七上・揚雄伝上）に「襲琬室與傾宮兮、若登高眇遠、亡國肅乎臨淵」とある。

汪洋 王逸注が「廣無極」と言うように、水の勢いがすさまじく、果てしなく大きく広がる様子を示す疊韻語。

忽荒 「荒忽」と同じく、視界が曖昧模糊とする様子をいう双声語。楚辞「九歌」湘夫人に「荒忽兮遠望、觀流水兮潺湲」、「遠遊」に「覽方外之荒忽兮、沖澗瀆而自浮」、前漢・賈誼「服鳥賦」（『史記』卷八四・屈原賈生列伝）に「寥廓忽荒兮、與道翱翔」とある。

13 修余兮桂衣 余が桂衣を修め

王逸注 整我衿裳、自結束也。（我が衿裳を整え、自ら結束するなり。）

14 騎霓兮南上 霓に騎りて南に上る

王逸注 託乘赤霄、登張翼也。（赤霄に託乗し、登りて翼を張るなり。）

通釈 私は華やかな服を整え、虹に乗って南へと上る。

桂衣 礼服の上に重ねる女性のうちかけ。宋玉「神女賦」（『文選』卷十九）に「振繡衣、被桂裳」、李善注に「劉熙釋名曰、婦人上服謂之桂」とある。ここでは王逸注が「衿裳」と換言しているように、華やかな衣裳の意で用いるのであろう。

騎霓 「霓」は、主虹よりも色が薄い副虹を指す。その霓を乗り物として騎乗すること。楚辞「九弁」に「驂白霓之習習兮、歷群靈之豐豐」とある。

南上 南方へ昇っていくこと。楚辞「離騷」の「濟沅湘以南征兮、就重華而陳詞」、「招魂」の「獻歲發春兮、汨吾南征」の「南征」を意識する語であろう。

15 乘雲兮回回 雲に乗りて回回たり

王逸注 載氣溶溶、意中惡也。（氣の溶溶たるに載り、意中惡しきなり。）

16 臺臺兮自強 臺臺として自ら強む

王逸注 稍稍陸進、遂自力也。（稍稍として陸り進み、遂に自ら力むるなり。）

通釈 雲に乗ってあちこち駆け回り、倦むことなく、自らを叱咤激励する。

押韻 陽部平声（洋・荒・上・強）。

回回 あちこち駆け回るさまを表す疊語。後漢・馬融「廣成頌」（『後漢書』列伝卷五十上・馬融伝上）に「（軍隊）徽燿霍奕、別驚分奔、騷擾聿皇、往來交舛、紛紛回回、南北東西」、李賢注に「並奔馳貌」とある。

臺臺 倦むことなくはげむさま。『詩經』大雅「文王」に「臺臺文王、令聞不已」、毛伝に「臺臺、勉也」とある。

自強 自ら努力して励むこと。『周易』・乾卦に「君子以自強不息」、楚辞「九章」懷沙に「懲連改忿兮、抑心而自強」とある。

17 將息兮蘭皋 將に蘭皋に息わんとするに

王逸注 且欲中休、止方澤也。（且く中ごろ休まんと欲し、方沢に止まるなり。）

18 失志兮悠悠 志を失いて悠悠たり

王逸注 從高視下、目眩惑也。（高きより下を視れば、目眩惑するなり。）

通釈 蘭におおわれた水辺で休もうとするのだが、がっかりして思い悩む。

蘭皋 蘭の生える沼沢、水辺。楚辞「離騷」に「步余馬於蘭皋兮、馳椒丘且焉止息」とある。

失志 落胆すること。宋玉「高唐賦」（『文選』卷十九）に「長吏隳官、賢士失志」とある。

悠悠 憂えて物思うさま。『詩經』邶風「終風」に「莫往莫來、悠悠我思」とある。

19 蒹葭兮黻黻 蒹葭して黻黻たり

王逸注 愁思蓄積、面垢黒也。（愁思蓄積して、面垢黒なり。）

20 思君兮無聊 君を思いて無聊なり

王逸注 想念懷王、忘寢食也。（懷王を想念して、寢食を忘るるなり。）

通釈 憂いが積もって顔が汚れて黒くなる。君主のことを思って気が気でない。

蒹葭 「紛緼」と同じ、盛んなさまを表す疊韻語。楚辞「九章」橘頌に「紛緼宜脩、婞而不醜兮」、王逸注に「紛緼、盛貌」とある。ここでは愁いが盛んに鬱積するさまを表す。

黻黻 王逸注に「面垢黒」とあるように、疲弊し憔悴して、顔が垢でどす黒く汚れているさまをいう。「九歎」逢紛に「顔黻黻以沮敗兮、精越裂而衰老」とある。この語は「漁父」の「屈原既放、……顔色憔悴、形容枯槁」のモチーフを踏まえたものであろう。

無聊 心に気がかりがあって落ち着けないこと。楚辞「九思」逢尤に「心煩憤兮意無聊、嚴載駕兮出戲遊」とある。

21 身去兮意存 身は去れども意は存すれば

王逸注 體遠情近、在胸臆也。（体遠く情近く、胸臆に在るなり。）

22 愴恨兮懷愁 愴恨として愁いを懷く

王逸注 心中憂恨、内悽惻也。(心中憂い恨みて、内に悽惻するなり。)

通釈 体は離れているが気持ちはあそこに在るので、悲しみに暮れて愁いは消えない。

押韻 幽部平声(阜・悠・聊・愁)。

愴恨 傷み悲しむこと。また悲傷するさま。前漢・蘇武「別李陵」詩(『藝文類聚』卷二九・人部・別)に「愴恨切中懷、不覺淚沾裳」、後漢・梁竦「悼騷賦」(『後漢書』列伝卷二四、梁竦伝注所引『東觀記』)に「臨岷川以愴恨兮、指丹海以爲期」、後漢・劉楨「遂志賦」(『藝文類聚』卷二六・人部・言志)に「愴恨惻切、我獨西行」とある。

懷愁 愁いを胸に抱くこと。後漢・侯瑾「箏賦」(『藝文類聚』卷四四・楽部・箏)に「感悲音而増歎、愴憔悴而懷愁」とある。

「思忠」

題解

忠義について思い悩む、の意。《The Songs》も“Thoughts on Loyalty Bent”とする。内容は、冒頭より主人公は天上遊行を開始し、天地四方や星々の間を経巡る。休息の後、再度遠遊を試みるが、時俗が正義を憎んでいるため、地上に自分がいられないことに思いがよぎり、煩悶し悲傷するところで終わる。天上遊行描写が多くを占める作品で、車列の描き方や星座を食器に見立てた宴の描写など、従来の遠遊文学を踏まえながらも新奇さを求めようとする傾向が見て取れる。

1 登九靈兮遊神 九靈に登りて神を遊ばせ

王逸注 想登九天、放精神也。(九天に登りて精神を放たんと想うなり。)

2 静女歌兮微晨 静女 微晨に歌う

王逸注 神女夜吟、聲激清也。(神女夜吟するに、声激清なり。)

通釈 天の果てまで登って精神を遊ばせると、静女が薄明るい夜明けに歌っている。

登九靈 「九靈」は王逸注に拠れば「九天」、すなわち天の最高地点を指す。楚辞「九歌」少司命に「孔蓋兮翠旂、登九天兮撫彗星」とある。

遊神 「九懷」匡機に「顧遊心兮鄙鄙」とある「遊心」同じく、心を塵外に遊ばせゆったりさせること。『説苑』建本篇に「今人誠能砥礪其材、自誠其神明、睹物之應、通道之要、觀始卒之端、覽無外之境、逍遙乎無方之内、彷徨乎塵埃之外、卓然獨立、超然絕世、此上聖之所遊神也」とある。

静女 しとやかなむすめ。『詩経』邶風「静女」に「静女其姝、俟我於城隅」とある。王逸注に拠れば天上の神女を指す。

微晨 夜明け間もない朝方。ただし王逸注が「夜吟」と解釈するのは不明である。

3 悲皇丘兮積葛 皇丘葛を積み

王逸注 皇、美。(皇は、美なり。)

4 衆體錯兮交紛 衆体錯わりて交紛するを悲しむ

王逸注 言己見美大之丘、葛草緣之而生、交錯茂盛。人不異而采取、則不成絺綌也。以言楚國士民衆多、君不異而舉用、則不知其有德也。(言うところは、己美大の丘を見るに、葛草之に縁りて生じ、交錯茂盛す。人異とせずして采取すれば、則ち絺綌と成らざるなり。以て楚国は士民衆多にして、君異とせずして挙用すれば、則ち其の有徳を知らざるを言うなり。)

通釈 美しい大きな丘にはつる草が数多く繁茂し、それらが交わりもつれ絡まっているのが悲しい。

悲皇丘 「皇丘」は、王逸注に拠れば美しく大きな丘。楚辞「離騷」に「忽反顧以流涕兮、哀高丘之無女」とある「高丘」と同じく、神仙のいる山々を指す。

積葛 葛が積み重なること。『詩經』周南「葛覃」に「葛之覃兮、施于中谷、維葉萋萋」、また楚辞「九歌」山鬼に「採三秀兮於山間、石磊磊兮葛蔓蔓」とあるのと同じように、蔓草の一種である葛が繁茂する様子をいう。

衆體 具体的には前句の「積」み重なった「葛」を指すのであろうが、楚辞「離騷」の「雖萎絕其亦何傷兮、哀衆芳之蕪穢」、「九弁」の「以爲君獨服此蕙兮、羌無以異於衆芳」の「衆芳」と同じく、主人公に対峙する人々や物であり、嫌悪や卑下する意を含む。

交紛 入り交じること。また入り交じるさま。後漢・張衡「西京賦」（『文選』卷二）に「上斑華以交紛、下刻峭其若削」、魏・陳琳「迷迭賦」（『藝文類聚』卷八一・藥香草部・迷迭）に「下扶疏以布濩、上綺錯而交紛」とある。

5 貞枝抑兮枯槁 貞枝抑えられて枯槁し

王逸注 貞、正。（貞、正なり。）

6 枉車登兮慶雲 枉車 慶雲に登る

王逸注 慶雲、喻尊顯也。言葛有正直之枝、抑棄枯槁而不見采。枉壞惡者、滿車陞進、反見珍重、御尊顯也。以言貞正之人、棄於山野、佞曲之臣、陞於顯朝。（慶雲、尊顯を喻うるなり。言うところは葛に正直の枝有るも、抑え棄てられ枯槁して采られず。枉がり壞れし悪しき者は、車に満ちて陞り進み、反って珍重せられ、尊顯に御するなり。以て貞正の人、山野に棄てられ、佞曲の臣、顯朝に陞るを言う。）

通釈 まっすぐな葛の枝は抑えつけられ、枯れ尽くしてしまうが、歪んだ枝が乗せられた車はめでたい雲まで登っていく。

貞枝 王逸注に「葛有正直之枝」とあるように、葛のまっすぐな枝。「貞正之人」、即ち志が強固で正直なる人を比喻する。

枯槁 植物が枯れ果てること。『老子』第七十六章に「人之生也柔弱、其死也堅強。萬物草木之生也柔脆、其死也枯槁」とある。敷衍して憔悴するさまを表す。楚辞「漁父」に「屈原既放、遊於江潭、行吟澤畔、顏色憔悴、形容枯槁」とある。

枉車 王逸注に拠れば葛の「枉壞惡者」、つまり曲がったり崩れたりして質が悪い枝が乗せられる車をいう。「貞正之人」と真逆の邪佞なる人々を比喻する。

慶雲 めでたい雲。瑞雲。王逸注が「喻尊顯也」と言うように、貴顯なる人々を比喻する。郊祀歌十九章「華燁燁」（『漢書』卷二二・礼楽志）に「神之徠、泛翊翊、甘露降、慶雲集」、前漢・揚雄「反離騷」（『漢書』卷八七上・揚雄伝上）に「懿神龍之淵潛、俟慶雲而將舉」とある。

7 感余志兮慘慄 余が志を感じしむること慘慄として

王逸注 動踊我心、如析割也。（我が心を動かし踊らしむること、析割するが如きなり。）

8 心愴愴兮自憐 心愴愴として自ら憐む

王逸注 意中切傷、憂悲楚也。（意中切傷し、楚を憂悲するなり。）

通釈 そのことで私はひどく悲しみ、心は愁いて一人自分を哀れに思う。

押韻 真部平声（神・晨・紛・雲・憐）。

慘慄 心が悲しみでひどくかき乱されるさま。「古詩十九首」之十七（『文選』卷二九）に

「孟冬寒氣至、北風何慘栗」とある。『疏証』は『補注』が示す「慘、一作慄」に拠って「慄慄」にすべきとする。「慄慄」も悲痛するさまを表す双声語。楚辞「九弁」に「僚栗兮若遠行、登山臨水兮送將歸」とある。

愴愴 悲痛するさまを表す疊語。『広雅』釈訓に「愴愴……悲也」、古楽府「孤兒行」（『樂府詩集』卷三八）に「愴愴履霜、中多蒺藜」、魏・呉質「思慕詩」（『三国志・魏書』卷二一、呉質伝）に「愴愴懷殷憂、殷憂不可居」とある。

自憐 ひとり自分を憐憫する。楚辞「九弁」に「廓落兮羈旅而無友生、惆悵兮而私自憐。……私自憐兮何極、心怛怛兮諒直」、「九懷」通路に「陰憂兮感余、惆悵兮自憐」、「撫余佩兮續紛、高太息兮自憐」とある。

9 駕玄螭兮北征 玄螭を駕して北征し

王逸注 將乘山神而奔走也。（將に山神に乗りて奔走するなり。）

10 躡吾路兮蔥嶺 余が路を蔥嶺に躡く

王逸注 欲踰高山、度阻險也。（高山を踰えて、阻險を度らんと欲するなり。）

通釈 黒いみずちに乗って北に旅をし、わが行く先を蔥嶺へと向ける。

玄螭 黒いみずち（竜の一種）。楚辞「遠遊」に「玄螭蟲象並出進兮、形蠕蚪而透蛇」。『今注』は「玄」字が五行説を意識した、「北征」に対応した配色であると指摘する。

北征 北へと旅をする。楚辞「九歌」湘君に「駕飛龍兮北征、遶吾道兮洞庭」とある。

躡吾路 「躡」は「向」に同じ。前句で挙げた楚辞「九歌」湘君の「遶吾道」を意識する表現であろう。「離騷」にも「遶吾道夫崑崙兮、路脩遠以周流」とある。

蔥嶺 中央アジア、パミール高原一帯を指す語。『漢書』九六上・西域伝に「東則接漢、隄以玉門・陽關、西則限以蔥嶺」、唐・顔師古注に「西河舊事云、蔥嶺其山高大、上悉生葱、故以名焉」とある。また楚辞「九懷」通路に「朝發兮蔥嶺、夕至兮明光」とある。

11 連五宿兮建旄 五宿を連ねて旄を建て

王逸注 係續列星、爲旄旄也。（列星を係続して、旗旄と為すなり。）

12 揚氛氣兮爲旌 氛氣を揚げて旌と為す

王逸注 舉布霾霧、作旄表也。（霾霧を挙げ布きて、旄表を作るなり。）

通釈 五つの星宿を連ねて旗に仕立てて建て、大気を掻き揚げて旗とする。

五宿 五つの星宿。『漢書』卷二十六・天文志に「孝武建元三年三月、有星孛於注、張、歷太微、干紫宮、至於天漢。……今星孛歷五宿」とある。『今注』及び疏証は「歲星（木星）」、「熒惑（火星）」、「鎮星（土星）」、「太白（金星）」、「辰星（水星）」を指すとする。

建旄 旗を立てること。楚辞「離騷」に「建雄虹之採旄兮、五色雜而炫耀」とある。

氛氣 雲や霞などの大気。『漢書』卷五六・董仲舒伝に「今陰陽錯繆、氛氣充塞」とあるが、この用例は唐・顔師古注「氛、惡氣也」とあるように不吉な災禍を象徴する雰囲気。この「氛氣」は「雰氣」に同じ。前漢・司馬相如「大人賦」（『史記』卷一一七・司馬相如列伝）に「祝融驚而蹕御兮、清雰氣而後行」とある。

爲旌 旗に仕立てること。楚辞「七諫」自悲に「借浮雲以送予兮、載雌霓而爲旌」とある。

13 歷廣漠兮馳驚 広漠を歴て馳驚し

王逸注 徑過長沙、馳駟馬也。（徑ちに長沙を過ぎて、駟馬を馳するなり。）

14 覽中國兮冥冥 中国を覽るに冥冥たり

王逸注 顧視諸夏、尚昧晦也。（諸夏を顧視するに、尚お昧晦なり。）

通釈 広い砂漠を渡って馬を駆るが、中国をみると、曖昧模糊としている。

廣漠 広く長い砂漠。『莊子』逍遙遊篇に「今子有大樹、患其無用、何不樹之於無何有之郷、廣莫之野」とある「廣莫之野」を踏まえる語であろう。西晋・夏侯湛「獵兔賦」（『藝文類聚』卷六六・産業部・田獵）に「爾乃乘露箱、御良馬、循又接於廣漠、弓矢連於曠野」とある。

馳驚 馬を走らせること。楚辞「離騷」に「忽馳驚以追逐兮、非余心之所急」、「遠遊」に「舒並節以馳驚兮、違絕垠乎寒門」、「惜誓」に「馳驚於杳冥之中兮、休息虜崑崙之墟」とある。

中國 地上の世界を指す。楚辞「惜誓」に「臨中國之衆人兮、託回飄乎尚羊」とある。

冥冥 暗く、視界がはっきりしないさまを示す疊語。楚辞「九歌」山鬼に「杳冥冥兮羌晝晦、東風飄兮神靈雨」、楚辞「九章」涉江に「深林杳以冥冥兮、猿狖之所居」とある。

15 玄武歩兮水母 玄武は水母と歩み

王逸注 天龜水神侍送余也。（天龜水神、侍して我を送るなり。）

16 與吾期兮南榮 吾と南榮に期す

王逸注 與己爲誓、會炎野也。南方冬温、草木常茂、故曰南榮。（己と誓いを爲し、炎野に会するなり。南方冬温かく、草木常に茂る、故に南榮と曰う。）

通釈 玄武は水母と歩調を同じくし、私と南榮にて会う約束をする。

押韻 耕部平声（征・嶺・旌・冥・榮）。

玄武 北方の神。亀と蛇が一体となった姿を見せる。『後漢書』卷十二・王梁伝に「而赤伏符曰、王梁主衛作玄武」、李賢注に「玄武、北方之神、龜蛇合體」とある。また楚辞「遠遊」に「時暖暄其曠莽兮、召玄武而奔屬」とある。

歩水母 「水母」は王逸注に拠れば水の神。ここは「玄武」が「水母」とともに足並みを揃えて主人公に付き従うことをいう。

與吾期 私と会う約束をする。「與…期」という表現は楚辞作品に頻出する。「九歌」湘夫人に「白蘋兮騁望、與佳期兮夕張」、「九章」抽思に「昔君與我誠言兮、曰黃昏以爲期」、「九章」思美人に「指嶠冢之西隈兮、與纁黃以爲期」とある。

南榮 王逸注に拠れば南方の地を指している語。西晋・陸機「応嘉賦」（『藝文類聚』卷三六・人部・隱逸）に「襲三閭之奇服、詠南榮之清歌」。前漢・司馬相如「上林賦」（『史記』卷一一七・司馬相如伝）にも「偃佺之倫暴於南榮」と見えるが、この用例は『文選』卷八「上林賦」の李善注所引郭璞注に「榮、屋南檐」とあるように、部屋の南側にあるひさしを指す。

17 登華蓋兮乘陽 華蓋に登りて陽に乗り

王逸注 上攀北斗、躡房星也。（上は北斗に攀じ、房星を躡むなり。）

18 聊逍遙兮播光 聊か逍遙として光を播く

王逸注 且徐遊戲、布文采也。（且く徐ろに遊戲し、文采を布くなり。）

通釈 華蓋星に登って太陽に乗り、しばらくゆったりとして光を広くしきわたらせる。

華蓋 星の名。『晋書』卷十一・天文志に「大帝上九星曰華蓋、所以覆蔽大帝之坐也」とある。また前漢・劉歆「遂初賦」（『古文苑』卷五）に「總六龍於駟房兮、奉華蓋於帝側」、後漢・張衡「西京賦」（『文選』卷二）に「華蓋承辰、天畢前驅」、薛綜注に「華蓋星覆北斗、王者法而作之」とある。

乘陽 楚辞「九懷」通路に「乘虬兮登陽」とある「登陽」に同じ。太陽へと駆け上っていくこと。

聊逍遙 しばらくゆったりとすること。楚辞「離騷」に「折若木以拂日兮、聊逍遙以相羊」、
「九歌」湘君に「崑不可兮再得、聊逍遙兮容與」等、楚辞作品に頻出する表現。

播光 光を敷き広がらせること。西晋・陸雲「喜霽賦」（『陸士龍文集』卷一）に「朱光播於瓮牖兮、素景衍乎中閨」とある。

19 抽庫婁兮酌醴 庫婁を抽きて醴を酌み

王逸注 引持二星、以斟酒也。（二星を引き持して、以て酒を斟むなり。）

20 援匏瓜兮接糧 匏瓜を援きて糧を接く

王逸注 啗食神果、志馱飽也。（神果を啗食して、志馱飽するなり。）

通釈 酒器に似た庫婁十星を手元に引き寄せて甘酒を酌み、ひさごに似た援匏星を引っこ抜いて食糧を受ける。

抽庫婁 「抽」は、引き出す、の意。天上の星々から抜き出すこと。「庫婁」は『晋書』卷十一・天文志に「庫樓十星、六大星爲庫、南四星爲樓、在角南」とある「庫樓」に同じ。十個の星から成る星座。『補注』が「按庫樓形似酌酒之器、故云」というように、星々をつないだ形が酒器に似ていたのであろう。

酌醴 甘酒を酌んで祝うこと。『詩經』小雅「吉日」に「以御賓客、且以酌醴」とある。

援匏瓜 「接」は上句の「抽」字と同じく星空から引き抜くこと。この「抽」字と「援」字を対応させる句作りをする例としては、「九懷」尊嘉に「抽蒲兮陳坐、援芙蓉兮爲蓋」とある。

「匏瓜」は、こぶりの瓜の形をした星座のこと。「匏瓜」に同じ。『補注』に引く隋・李播「大象賦」に「匏瓜薦果於震閨」とあり、苗為の注に「五星在離珠北、天子之果園、占大光潤則歲豐、不爾則瓜果之實不登」とある。ここではそれを食べ物を盛るひさごとして用いる。

魏・曹植「洛神賦」（『文選』卷十九）に「歎匏瓜之無匹兮、詠牽牛之獨處」とある。

接糧 「接」は食糧を受けるの意。『新詠』が「盛食糧」、『今詠』が「承接食糧」とするのを参照する。

21 畢休息兮遠逝 畢く休息して遠く逝かんとし

王逸注 周遍留止、而復去也。（周遍く留止して、復た去らんとするなり。）

22 發玉軻兮西行 玉軻を發して西に行く

王逸注 引支車木、遂驅馳也。（支車木を引き、遂に驅馳するなり。）

通釈 しっかり休息して遠くに向かおうとし、玉の止め木を外して、西へと出発する。

休息 休むこと。楚辞「惜誓」に「馳驚於杳冥之中兮、休息虜崑崙之墟」、「七諫」哀命に「從水蛟而爲徙兮、與神龍乎休息」とある。

遠逝 「遠遊」に同じ。遠く旅立つこと。楚辞作品に頻出する語の一つ。「離騷」に「日勉遠逝而無狐疑兮、孰求美而釋女、……何離心之可同兮、吾將遠逝以自疏」、「七諫」怨世に「意有所載而遠逝兮、固非衆人之所識」とある。

發玉軻 玉で造られた車止めを外して出発すること。「發軻」の語も楚辞作品に頻出する。「離騷」に「朝發軻於蒼梧兮、夕余至乎縣圃、……朝發軻於天津兮、夕余至乎西極」、「遠遊」に「朝發軻於太儀兮、夕始臨乎於微閨」とある。

23 惟時俗兮疾正 惟れ時俗の正を疾めば

王逸注 欠

24 弗可久兮此方 此方に久しくすべからず

王逸注 世憎忠信、愛諂諛也。（世 忠信を憎み、諂諛を愛す。）

通釈 世俗の人々が忠正なる者を憎むのであれば、ここに長居してはいけない。

疾正 王逸注が「世憎忠信」とするの**に**拠れば、中正中直なる人物を憎悪すること。

時俗 当時の凡俗の人々。あるいは時流。これも楚辞作品に頻繁に見られる。「離騷」に「固時俗之工巧兮、偃规矩而改錯」、「遠遊」に「悲時俗之近阨兮、願輕舉而遠遊」とある。

弗可久 長居してはいけない、と禁止する語。楚辞「招魂」に「歸來兮、不可以久淫些」とある。

25 寤辟標兮永思 寤めて辟つこと標として永く思い

王逸注 心常長愁、拊心踊也。辟、拊心貌也。（心常に長く愁い、心を拊ちて踊るなり。辟は、心を拊つの貌なり。）

26 心怫鬱兮内傷 心怫鬱として内に傷む

王逸注 憂思積結、肝腑爛也。（憂思積結して、肝腑爛るるなり。）

通釈 夢から覚めても、どくんと動悸がして長いこと思い悩み、鬱々と心中に痛みを抱える。

押韻 陽部平声（陽・光・糧・行・方・傷）。

寤辟標 夢から覚めても動悸が胸を打つこと。「辟」は「擗」に通じる。『詩経』邶風「柏舟」に「靜言思之、寤辟有標」、毛伝に「辟、拊心也。標、拊心貌」とある。

永思 長い時間考えあぐねること。楚辞「哀時命」に「悵惓罔以永思兮、心紆軫宗而増傷。…廊抱景而獨倚兮、超永思乎故郷」、「七諫」自悲に「居愁歎其誰告兮、獨永思而憂悲」とある。

怫鬱 気が塞いで鬱屈するさまを表す疊韻語。楚辞「七諫」沈江に「不顧地以貪名兮、心怫鬱而内傷」、「九懷」匡機に「怫鬱兮莫陳、永懷兮内傷」。また「九歎」惜賢に「覽屈氏之離騷兮、心哀哀而怫鬱。……（歎曰）憂心展轉愁怫鬱兮」とある。

内傷 内心が傷つくこと。楚辞「九章」悲回風に「悲回風之搖蕙兮、心冤結而内傷」。前項「怫鬱」で挙げた「七諫」沈江、「九懷」匡機の例も参照。

「陶壅」

題解

題意は不明。《The Songs》は“Raising Barriers（障壁を上げる）”とし、『今訳』・『今注』は「鬱陶」と「壅塞」の意とする。君主の判断能力が「壅塞」、蔽われ塞がれているのを主人公が「鬱陶」、心中でもどかしく思う、といったことになろうか。内容は、暗澹たる世情や混乱する時俗を見かねた主人公が天上遊行を実施し、途中相談者の力を得て羽化登仙をこころみるところまでいく。ただここでも下界の様子が気に掛かり、なかなか決断が付かない。最後は皋陶のような賢臣となる願望があっても、仕えるべき君主はいないことに思いを致し、その悲しみを詩にして気持ちを晴らそうとする、というものである。

1 覽杳杳兮世惟 杳杳たる世の惟いを覽るに

王逸注 觀楚泥濁、俗愚蔽也。（楚の泥濁、俗の愚蔽を觀るなり。）、

2 余惆悵兮何歸 余惆悵として何くにか帰らん

王逸注 罔然失志、無依附也。（罔然として志を失い、依附する無きなり。）

通釈 暗い世の人々の思いを眺めると、私は悲しくて心が晴れず、いったいどこに帰ればいいのか。

世惟 世の（人々の）思い。「惟」字について、『補注』は「惟、謀也」とするが、近人・徐

仁甫『古詩別解』（上海古籍出版社、1984年）はこれを否定し、押韻面からこの部分は元来「覽世惟兮杳杳」とあったものが底本のように転倒したものだとする。『疏証』はさらに徐説を批判して底本通りとしながら、「惟讀如摧（「摧」はくたく・くだけるの意）」という新説を立てる。『今注』は『補注』が挙げる「惟、一作維」を承けて「世維」が正しいとし、「世綱（世の綱紀）」の意だとしている。要するにこの語については諸説紛々としている。ここではその当否の判断は保留し、『新訳』の「世俗想法」、『今訳』の「世人的想法」といった解釈に従っておく。

杳杳 暗く閉ざされているさまを表す疊語。楚辞「九章」懷沙に「眴兮杳杳、孔靜幽默」とある。

惆悵 悲しみもだえて心が晴れぬさまを表す双声語。楚辞「九弁」に「廓落兮、羈旅而無友生、惆悵兮、而私自憐。……。春秋連連而日高兮、然惆悵而自悲」、「九懷」通路に「陰憂兮感余、惆悵兮自憐」、「九思」怨上に「蟲多兮夾余、惆悵兮自悲」とある。

何歸 どこにも行き場がないことを強調する反語表現。後漢・崔琦「四皓頌」（『太平觀覽』卷五七二・樂部・歌）に「唐虞世遠、吾將何歸」とある。

3 傷時俗兮溷亂 時俗の溷亂を傷み

王逸注 哀愍當世、衆貪暴也。（当世の、衆の貪暴なるを哀愍するなり。）

4 將奮翼兮高飛 將に翼を奮って高く飛ばんとす

王逸注 振翅翱翔、絶塵埃也。（翅を振るって翱翔し、塵埃を絶つなり。）

通釈 世俗の混乱に傷つき、翼を振るって高く飛び上がろうとする。

時俗 当時の凡俗の人々。あるいは時流。前掲「九懷」思忠の23・24「惟時俗兮疾正、弗可久兮此方」とある。その「時俗」の項目を参照。

溷亂 混乱すること。楚辞「離騷」に「世溷濁而不分兮」、王逸注に「溷、亂也」とある。後漢・趙壹「刺世疾邪賦」（『後漢書』列伝卷七十・文苑伝）に「徳政不能救世溷亂、賞罰豈足懲時清濁」とある。

奮翼 鳥のように翼を羽ばたいて飛び上がること。前漢・賈誼「服鳥賦」（『史記』卷八四・屈原賈生列伝）に「服乃歎息、舉首奮翼」とある。

5 駕八龍兮連蜷 八龍の連蜷たるを駕し

王逸注 乘虬翱翔、見容貌也。（虬に乗りて翱翔し、容貌を見すなり。）

6 建虹旌兮威夷 虹旌の威夷たるを建つ

王逸注 樹螭螭旗、紛光耀也。（螭螭たる旗を樹て、紛として光り耀くなり。）

通釈 うねうねと連なる八頭の龍を統御し、ひらひらとたなびく虹の旗を建てる。

駕八龍 「八龍」神話中の八頭の龍。「駕」は「八龍」に車を牽かせて御すること。楚辞「離騷」に「駕八龍之婉婉兮、載雲旗之委蛇」、王逸注に「言己乘八龍神智之獸」とある。また「遠遊」に「駕八龍之婉婉兮、載雲旗之委蛇」、前漢・揚雄「反離騷」（『漢書』卷八七上・揚雄伝上）に「既亡鸞車之幽藹兮、（焉）駕八龍之委蛇」とある。

連蜷 長く連なりながらくねくね曲がるさまを表す疊韻語。楚辞「九歌」雲中君に「靈連蜷兮既留、爛昭昭兮未央」と見えるが、王逸注に「連蜷、巫迎神導引貌也」とあるように、神降ろしをする巫のたおやかな仕草を表す。そこから派生して車馬が長く連なる様子を表すようになる。前漢・揚雄「甘泉賦」（『漢書』卷八七上・揚雄伝上）に「蛟龍連蜷於東鐻兮、白虎敦圍虜昆侖」、唐・顔師古注に「連蜷、卷曲貌」とある。

建虹旌 虹が描かれた旗を立てること。楚辞「遠遊」に「建雄虹之采旌兮、五色雜而炫耀」、「九歎」遠遊に「徴九神於回極兮、建虹采以招指」とある。

威夷 楚辞「離騷」の「載雲旗之委蛇」の「委蛇」と同じく、旗がひらひらと曲がりくねるさまを表す準疊韻語（「威」は微部、「夷」は脂部）。派生してぐねぐねと屈曲するものを表す語としても用いられる。魏・嵇康「琴賦」（『文選』卷十八）に「指蒼梧之迢遞、臨迴江之威夷」とある。

7 觀中宇兮浩浩 中宇の浩浩たるを觀て

王逸注 大哉天下、難遍照也。（大いなるかな天下、遍くは照らし難きなり。）

8 紛翼翼兮上躋 紛として翼翼として上に躋る

王逸注 盛氣振迅、陞天衢也。（盛氣振迅し、天衢に陞るなり。）

通釈 広大なる天下を見下ろしながら、意気盛んに飛び上がり天上へと向かう。

中宇 王逸注に拠れば「天下」、すなわち地上、中国世界をいう。前漢・司馬相如「大人賦」（『史記』卷一一七・司馬相如列伝）に「世有大人兮、在乎中州」とある「中州」とも通じる語であろう。劉宋・顔延之「三月三日曲水詩序」（『文選』卷四六）に、「將徙縣中宇、張樂岱郊。」呂延濟注に「中宇、中國也」とある。

浩浩 広大なさま。『詩經』小雅「雨無正」に「浩浩昊天、不駿其德」、孔穎達疏に「浩浩然、廣大之旻天」とある。

紛翼翼 隊列を盛んにして進む様子。後漢・張衡「思立賦」に「紛翼翼以徐戾兮、焱回回其揚靈」、李周翰注に「紛、盛兒、翼翼、行兒」とある。「翼翼」は高く飛び上がるさまの意も含む。楚辞「離騷」に「鳳皇翼其承旂兮、高翱翔之翼翼」とある。

上躋 楚辞「離騷」に「駟玉虯以乘鸞兮、溘埃風余上征」、「遠遊」に「載營魄而登霞兮、掩浮雲而上征」とある「上征」等と重なる語で、天上に昇っていくことを表す。「躋」は『爾雅』積詁に「躋、假、格、陟、躋、登、陞也」とある。

9 浮溺水兮舒光 溺水に浮かび光を舒べ

王逸注 遂渡沈流、揚精華也。（遂に沈流を渡り、精華を揚ぐるなり。）

10 淹低徊兮京汭 淹しく京汭に低徊す

王逸注 且留水側、息河洲也。水中可居爲洲、小洲爲渚、小渚爲汭。京汭、即高洲也。（且く水側に留まり、河洲に息うなり。水中の居るべきを洲と爲し、小洲を渚と爲し、小渚を汭と爲す。京汭は、即ち高洲なり。）

通釈 溺水（弱水）に浮かんで光をのべ広げ、しばらく留まって、高くなっている中州のあたりを徘徊する。

溺水 「弱水」に同じ。西王母がいる仙境崑崙山にある川の名。『史記』卷一二三、大宛列伝に「安息長老傳聞、條枝有弱水・西王母、而未嘗見」、唐・司馬貞『史記索隱』所引の「括地図」に「崑崙弱水、非乘龍不至」とある。また楚辞「哀時命」に「弱水汨其爲難兮、路中斷而不通」、前漢・司馬相如「大人賦」（『史記』卷一一七・司馬相如列伝）に「經營炎火而浮弱水兮、杭絶浮渚而涉流沙」とある。

舒光 光を広げ延ばすこと。魏・応瑒「撰征賦」（『藝文類聚』卷五九・武部・戦伐）に「崇殿鬱其嵯峨、華宇爛而舒光」、魏・曹植「迷迭香賦」（『藝文類聚』卷八一）に「附玉體以行止兮、順微風而舒光」とある。

淹 久しく留まること。楚辞「離騷」に「日月忽其不淹兮、春與秋其代序」、王逸注に「淹、久也」とある。

低徊 行き来しながらさまようさま。楚辞「九歌」東君に「長太息兮將上、心低徊兮顧懷」、「九章」抽思に「低徊夷猶、宿北姑兮」とある。

京沚 「京坻」に同じ。水辺の中州が高くなっている部分。『爾雅』积水に「水中可居者曰洲、小洲曰渚、小渚曰沚、小沚曰坻」という。関連して『詩経』小雅「甫田」に「曾孫之庾、如坻如京」、毛伝に「京、高丘也」、鄭箋に「坻、水中之高地也」とある。

11 屯余車兮索友 余が車を屯して友を索め

王逸注 住我之駕、求松喬也。（私の駕を住めて、松、喬を求むるなり。）

12 睹皇公兮問師 皇公を睹て師を問う

王逸注 遂見天帝、諮秘要也。（遂に天帝に見え、秘要を諮るなり。）

通釈 車を集め止めて友を求め、皇公を見つけて師法とすべきことについてたずねた。

屯余車 車列の隊列を集めとどめること。楚辞「離騷」に「屯余車其千乗兮、齊玉軛而並馳」、「遠遊」に「屯余車之萬乗兮、紛容與而並馳」とある。

索友 友とすべき人物を求めること。王褒「四子講徳論」（『文選』卷五一）に「於是相與結侶、攜手俱遊、求賢索友、歷于西州」とある。また楚辞「哀時命」に「與赤鬆而結友兮、比王喬而爲耦」、「七諫」諷諫に「同音者相和兮、同類者相似。飛鳥號其群兮、鹿鳴求其友」というように、同類のモチーフが見られる。

皇公 王逸注に拠れば「天帝」。諸家もそれに従うが、『疏証』は否定し「古之通天文者、故以師爲稱」とする。おそらく「皇公雜子星二十二卷」（『漢書』卷三十、藝文志、數術略天文家）という書の存在が念頭にあったのであろう。いずれにせよ、この「皇公」は、楚辞「離騷」の「靈氣」や「遠遊」の「王子喬」と同様に、楚辞の主人公が天上飛行をする切っ掛けとなる相談者の役割を与えられていることは間違いない。

問師 王逸注の「諮秘要」を参照すれば、師法となるべきことがらを尋ねることをいう。次の聯がその答えとなる

13 道莫貴兮歸真 道は真に帰るより貴きは莫し

王逸注 執守無爲、修朴素也。（無爲を執守し、朴素を修むるなり。）

14 羨余術兮可夷 余が術を羨めば夷ぶべしと

王逸注 念己道藝、可悅樂也。詩云、既見君子、我心則夷。夷、喜也。（己の道藝を念い、悅樂すべきなり。詩に云う、既に君子を見て、我が心則ち夷なりと。夷は、喜ぶなり。）

通釈 その答えは「道は真に帰る以上に貴いものはない、私のやり方を慕うならば喜ばしいことになるであろう」とのこと。

押韻 脂部平声（惟・歸・飛・夷・躋・汙・師・夷）。

歸真 「真」の境地に帰ること。楚辞「哀時命」に「除穢累而反真」とある「反真」に同じ。「九懷」昭世にも「世溷兮冥昏、違君兮歸真」とある。楚辞「卜居」に「寧超然高舉、以保真乎」、『淮南子』汜論訓に「全性保真、不以物累形」とみえる「保真」と同類で、道家・神仙家の用語に由来するものであろう。

羨余術 「羨」羨み慕うこと。楚辞「遠遊」に「奇傳說之托辰星兮、羨韓衆之得一」とある。「余術」はさきの「皇公」の「術」と解する。「(道)術」字も楚辞作品で唯一見られる例であり、前句の「歸真」同様、道家・神仙家の用語を意識するものと言えるかもしれない。

可夷 「夷」は王逸注に拠れば喜ぶこと。『詩経』鄭風「風雨」に「既見君子、云胡不夷」、毛伝に「夷、説也」とある。「可夷」は喜ぶにふさわしい、慶賀に値する、といった意となろう。ちなみに王逸注が挙げる『詩経』の引文は、『詩経』召南「草虫」に「亦既見止、亦既觀止、我心則夷」とあるのを踏まえるが、その毛伝は「夷、平也」とする。

15 吾乃逝兮南娛 吾乃ち南娛に逝き

王逸注 往之太陽、遊九野也。（往きて太陽に之き、九野に遊ぶなり。）

16 道幽路兮九疑 幽路道り九疑に〔向かわんと〕す

王逸注 涉歴深山、過舜墓也。（深山を涉歴し、舜墓を過るなり。）

通釈 私はそこを去って南に遊び、奥深い道を経てから九疑山に道を取る。

南娛 南方の地。前漢・司馬相如「大人賦」（『漢書』卷五七下・司馬相如伝下）に「使句芒其將行兮、吾欲往乎南娛」とある。ちなみに『史記』卷一一七・司馬相如列伝所引の「大人賦」では「南嬉」に作る。

道幽路 「道」は「經由して」の意の助詞。『史記』卷八・高祖本紀に「太尉周勃道太原入、定代地」、劉宋・裴駟『史記集解』に「（呉）韋昭曰、道、猶從」とある。「幽路」は奥深い道。梁・江淹「丹沙可學賦」（『梁江文通文集』卷一）に「故從師而問道、冀幽路之或暘」とある。

九疑 「九嶷山」に同じ。湖南省寧県の南方にあるとされた山。九つの峰の形が似ているため、見るものが迷い疑うので名づけられたという。この地に巡察した舜帝が死亡し、その廟があるとされる。『山海経』海内経に「南方蒼梧之丘、蒼梧之淵、其中有九嶷山、舜之所葬、在長沙零陵界中」、郭璞注に「其山九谿皆相似、故云、九疑」とある。また、『史記』卷一・五帝本紀に「〔舜〕葬於江南九疑、是爲零陵」とある。

17 越炎火兮萬里 炎火の万里なるを越え

王逸注 積熱彌天、不可處也。（積熱 天を弥り、処るべからざるなり。）

18 過萬首兮嶷嶷 万首の嶷嶷たるを過る

王逸注 見海中山、數萬頭也。海中山石、嶷嶷嶽嶽、萬首交峙也。（海中山を見るに、數万頭なり。海中の山石、嶷嶷嶽嶽として、万首交峙するなり。）

通釈 炎火が万里にも続く山を超え、幾万もの高い峰々を通り過ぎる。

炎火 崑崙山の周囲にある伝説の山。『山海経』大荒西経に「有大山名曰崑侖之丘……其下有弱水之淵環之、其外有炎火之山、投物輒然」、楚辞「大招」に「魂乎無南。南有炎火千里、蝮蛇蜒只」、前漢・司馬相如「大人賦」（『史記』卷一一七・司馬相如列伝）に「經營炎火而浮弱水兮、杭絶浮渚而涉流沙」とある。

萬首 幾万もの山々。王逸注は「海中山」とするが典拠は不明。『補注』は海中の山の名とする。

嶷嶷 「嶷嶷」に同じ。山が高くそびえるさまを表す疊語。東晋・陶淵明「感士不遇賦」（『箋注陶淵明集』卷六）に「山嶷嶷而懷影、川汪汪而藏聲」とある。

19 濟江海兮蟬蛻 江海を濟りて蟬蛻し

王逸注 遂渡大水、解形體也。（遂に大水を渡り、形体を解くなり。）

20 絶北梁兮永辭 北梁を絶りて永く辞す

王逸注 超過海津、長訣去也。（海津を超過し、長訣して去るなり。）

通釈 江海を渡ってもとの体から抜け替わり、北の渡し場を超えて長く別れを告げる。

江海 海や川。楚辞「七諫」怨世に「寧爲江海之泥塗兮、安能久見此濁世」とある。

蟬蛻 羽化登仙すること。『淮南子』精神訓に「（至人）抱素守精、蟬蛻蛇解、游於太清、輕舉獨往、忽然入冥」とある。

北梁 北側の橋。「九懷」以降送別の地をこの語で表すようになる。齊・謝朓「齊隨王鼓吹

曲・送遠曲」（『樂府詩集』卷二十）に「北梁辭歡宴、南浦送佳人」、梁・江淹「別賦」（『文選』卷十六）に「視喬木兮故里、決北梁兮永辭」とある。

永辭 永久の別れを告げる。「九懷」通路に「紉蕙兮永辭、將離兮所思」とある。

21 浮雲鬱兮晝昏 浮雲鬱として昼に昏く

王逸注 楚國潰亂、氣未除也。（楚國潰亂し、氣未だ除かれざるなり。）

22 霾土忽兮塵塵 霾土忽ち塵塵たり

王逸注 風俗塵濁、不可居也。（風俗塵濁ありて、居るべからざるなり。）

通釈 空に浮く雲は鬱蒼として、昼なのに暗く、土埃が突然舞い上がって辺りを覆う。

浮雲鬱 「浮雲」は空に漂う雲で、楚辞作品の中で多用される語。この句と類似する例としては、「七諫」沈江に「浮雲陳而蔽晦兮、使日月乎無光」とある。その「浮雲」が鬱蒼とするさまを表す「鬱」と組み合わせる先例としては、前漢・司馬相如「長門賦」（『文選』卷十六）に「浮雲鬱而四塞兮、天窈窈而晝陰」、李善注に「毛萇詩傳（『詩經』邶風「晨風」）曰、鬱、積也」とある。

晝昏 昼間なのに暗いこと。楚辞「九歌」山鬼に「杳冥冥兮羌晝晦、東風飄兮神靈雨」とある「晝晦」に同じ。

霾土 土を降らせるほこり。『詩經』邶風「終風」に「終風且霾、惠然肯來」、毛伝に「霾、雨土也」とある。”

塵塵 つちぼこりが一面に広がる様子を表す疊語。楚辞「九歎」惜賢に「俟時風之清激兮、愈氛霧其如塵」とある。

23 息陽城兮廣夏 陽城の広夏に息い

王逸注 遂止炎野大屋廬也。（遂に炎野の大屋廬に止まるなり。）

24 衰色罔兮中怠 衰色罔として中は怠る

王逸注 志欲懈倦、身罷勞也。（志は懈り倦まんと欲し、身は罷勞するなり。）

通釈 陽城の大広間で休むものの、表情は衰えて愁いがにじみ、気持ちもだらけてしまった。

陽城 春秋時の楚の県名。宋玉「登徒子好色賦」（『文選』卷十九）に「嫣然一笑、惑陽城、迷下蔡」李善注に「陽城・下蔡、二縣名。蓋楚之貴介公子所封、故取以喻焉」とある。

廣夏 広々とした部屋。『漢書』卷七十二・王吉伝に「夫廣夏之下、細旃之上、明師居前、勸誦在後」、唐・顔師古注に、「廣夏、大屋也」とある。また後漢・辺讓「章華台賦」（『後漢書』列伝卷七十・文苑伝）に「歸乎生風之廣夏兮、修黃軒之要道」、魏・嵇康「琴賦」（『文選』卷十八）に「若乃高軒飛觀、廣夏閑房」とある。

衰色罔 「衰色」は容貌や表情の衰えをいう。「罔」は気持ちがふさぐさま。宋玉「神女賦」（『文選』卷十九）に「罔兮不樂、悵然失志」、李善注に「罔、憂也」とある

中怠 王逸注の「志欲懈倦」に拠れば、精神に緊張感が無くなり怠けてだらしくなること。

25 意曉陽兮燎寤 意曉陽として燎寤し

王逸注 心中燎明、内自覺也。（心中燎明にして、内自覺するなり。）

26 乃自杉兮在茲 乃ち自ら茲に在るを杉る

王逸注 徐自省視至此處也。（徐ろに自ら此の処に至るを省視するなり。）

通釈 やがて気持ちがはっきりと目覚めてきて、ようやくここに在ることの意味をはっきりと省みることができた。

曉陽 『校補』は「陽」字を「讀爲暢」とし、「曉暢」とは「猶通達也」とする。ただ「陽」にも元来「清」というニュアンスがある。『周礼』冬官考工記・弓人に「凡相幹、欲赤黑而陽聲。赤黑則郷心、陽聲則遠根」、鄭玄注に「陽、猶清也」とある。すなわち「曉陽」とは意識がはっきりとしたさまを表す。

燎寤 王逸注に拠れば、明瞭に悟ること。”

自杉 『校補』は「息軫」の字にすべきで、「猶停車也」というニュアンスだとするが、『疏証』は「杉」は「診」の俗字であるとする。『大広益会玉篇』卷九、言部に「診、除刃、之忍二切、視驗也。杉、俗」とあるので、ここは『疏証』の見解に従いたい。「自杉」は王逸注が「自省視」と言うように自らの存在意義を省みることを用いる。

27 思堯舜兮襲興 堯舜の襲ねて興るを思い

王逸注 喜慕二聖、相繼代也。（二聖の相繼いで代わるを喜慕するなり。）

28 幸咎繇兮獲謀 咎繇のごとく謀を獲んことを幸う

王逸注 冀遇虞舜、與議道也。（虞舜に遇いて、与に道を議せんことを冀うなり。）

通釈 帝堯・帝舜が続けて興ったことを思慕し、咎繇のように君主を輔佐して事を為すことができるよう願う。

咎繇 「皋陶」と同じく、帝舜に仕えた伝説上の政治家。法律に詳しく刑罰を掌った。楚辞作品内にもしばしば登場する。「離騷」に「湯禹嚴而求合兮、摯咎繇而能調」、「九章」惜誦に「俾山川以備御兮、命咎繇使聽直」とある。また「九歎」離世に「立師曠俾端辭兮、命咎繇使並聽」とある。

29 悲九州兮靡君 九州の君靡きを悲しみ

王逸注 傷今天下無聖主也。（今天下に聖主無きを傷むなり。）

30 撫軾歎兮作詩 軾に撫りて歎き詩を作る

王逸注 伏車浩歎、作風雅也。（車に伏して浩歌し、風雅を作すなり。）

通釈 天下に聖なる君主がないのを悲しみ、車の横木にもたれ歎きながら詩を作る。

押韻 之部平声（娛・疑・嶷・辭・塵・怠・茲・謀・詩）。

九州 天下世界、中国全土を指す語で、楚辞作品にも多く用いられる。楚辞「離騷」に「思九州之博大兮、豈唯是其有女」、王逸注に言我思念天下博大、豈獨楚國有君臣而可止乎」、「九歌」大司命に「紛總總兮九州、何壽夭兮在予」、「九懷」昭世にも「歷九州兮索合、誰可與兮終生」とある。

撫軾 「撫式」に同じ。乗車時に車の前の横木に両手を置いて体をうつ伏せて挨拶をすることをいう。『礼記』曲礼上に「國君撫式、大夫下之。大夫撫式、士下之」鄭玄注に「撫、猶據也。據式小俛、崇敬也」とある。ここではうつむいて悲嘆する仕草を表す。

作詩 心中の思いを詩に仕立てること。楚辞「哀時命」に「志憾恨而不逞兮、杼中情而屬詩」とある「屬詩」と同じである。

「株昭」

題解

この篇も題意はよくわからない。《The Songs》は“Quenching the Light（灯りを消す）”とし、『今注』も不詳としながらも、小人が頓達することを諷刺する意という説を立てている。内容は前半に、世のあるべき秩序や価値観が尽く転倒している事象が数多く並べられる。それ

に堪えられない主人公は遠遊を開始し、旅の楽しさに浸る様子が中盤に描かれる。主人公は更なる旅を続けようとするが、故郷を振り返れば政治混乱が進む状況がまた目に入り、滂沱の涙を流す、というところで話は終わる。ストーリーは例によって千篇一律なものだが、冒頭部ではあべこべな状況を敷き並べる列挙的修辭が取りこまれており、中盤では「山河が歌い踊る」といった擬人法的自然描写が使われていて、「九懷」作品の文藝性・遊戯性を考える上で重要である。

1 悲哉于嗟兮 悲しいかな于嗟

王逸注 愁思憤懣、長歎息也。(愁思憤懣し、長く歎息するなり。)

2 心内切磋 心の内切磋す

王逸注 意中激感、腸痛惻也。(意中激しく感じ、腸は痛み惻むなり。)

通釈 悲しいことであるなあ、心中は激しく苦しむ。

悲哉 悲嘆を表す。楚辞「九弁」に「悲哉、秋之爲氣也」とある。

于嗟 感嘆のことば。楚辞「卜居」に「讒人高張、賢士無名。吁嗟默兮、誰知吾之廉貞」とある。

心内 心のうち。楚辞「九懷」尊嘉に「運余兮念茲、心内兮懷傷」とある。

切磋 内面に激しくぶつかり合うものがある、傷み悲しむこと。『詩經』衛風「淇奥」に「如切如磋、如琢如磨」とあって、玉石の加工や学問・人格の修練及び陶冶などを示す「切磋」の用法とはニュアンスを異にする。

3 款冬而生兮 款冬は生じ

王逸注 物叩盛陰、不滋育也。(物 盛陰を叩けば、滋育せざるなり。)

4 凋彼葉柯 彼の葉柯を凋ましむ

王逸注 傷害根莖、枝卷曲也。(根莖を傷害し、枝卷曲するなり。)

通釈 雑草たる款冬は生い茂り、冬枯れしないはずの木の枝葉を萎ませる。

款冬 雑草の名。ふき。王逸注は「款冬」を「冬を款く」ものと解釈するが、清・王引之はこれに異を唱え、3～8句は、「七諫」などに見られる、通常の価値観が全く転倒していることを説明しようとする、列挙的修辭表現であることを指摘して以下のように述べる。「反復「九懷」文義、實與王逸殊指。其曰、「款冬而生兮、……」總言小人道長、君子道消耳。「款冬」・「瓦礫」・「鉛刀」以喻小人。「葉柯」・「隨和」・「太阿」以喻君子。「七諫[筆者注、謬諫]」云、「鉛刀進御兮、造棄太阿。拔擐玄芝兮、列樹芋荷。」彼言「玄芝」、猶此言「葉柯」也。彼言「芋荷」、猶此言「款冬」也。「鉛刀」・「太阿」取譬正與此同。此言陰盛陽窮之時、款冬微物、乃得滋榮、其有名材柯葉茂美者、反凋零也。款冬而生、指款冬之草不得以爲物叩盛陰。草之名款冬、其聲因「顛凍」而轉(『爾雅』[釋草]菀奚、顛凍。郭璞曰、款冬。)、更不得因文生訓(王念孫『讀書雜誌』卷一六・余論下・楚辞)。

葉柯 葉や枝。桂などの常緑樹の枝葉を指して言うのであろう。『藝文類聚』卷八九・木部・桂に「『異物志』曰、桂之灌生、必粹其族、柯葉不渝、冬夏常緑」とある。

5 瓦礫進寶兮 瓦礫は寶に進められ

王逸注 佞僞愚戇侍帷幄也。(佞僞愚戇、帷幄に侍するなり。)

6 捐弃隨和 隨和を捐棄す

王逸注 貞良君子、棄山澤也。(貞良なる君子は、山沢に棄てらるるなり。)

通釈 かわらやつぶては宝として進呈され、逆に隨和を遺棄してしまう。

瓦礫 かわらや小石。値打ちのないもの、小人や愚者を喩える。

進寶 宝物として権力者の側に進呈されること。

隨和 随侯の持っていた珠と楚の卞和のみつけた璧。すぐれた才徳や、それを有する者、君子を喩える。司馬遷「報任少卿書」（『漢書』卷六二・司馬遷伝）に「若僕大質已虧缺、雖材懷隨和、行若由夷、終不可以爲榮、適足以發笑而自點耳。」とある。

捐棄 無駄な物として遺棄すること。『管子』立政篇に「正道捐棄、而邪事日長」とある。

7 鉛刀厲御兮 鉛刀は厲しとして御いられ

王逸注 頑嚚之徒、任政職也。（頑嚚の徒、政職に任せらるるなり。）

8 頓棄太阿 太阿を頓棄す

王逸注 明智忠賢、放斥逐也。（明智忠賢、放たれ斥逐せらるるなり。）

通釈 鉛の刀が切れ味鋭きものとして使われ、名刀太阿がなまくら刀と見なされ捨てられる。

鉛刀 切れ味の悪い鉛の刀。役立たずの人や物を喩える。前漢・賈誼「弔屈原文」（『史記』卷八四・屈原賈生列伝）に「莫邪爲頓兮、鉛刀爲銛」、楚辞「七諫」諷諫・乱辞に「鉛刀進御兮、遙棄太阿」とある。

厲御 下句の「頓棄」と対になる語で、切れ味が鋭きものとして進呈されること。

頓棄 切れ味が鈍いものとして放棄されること。前掲した賈誼「弔屈原文」の句に付された劉宋・裴駰『史記集解』に「頓、鈍也」とある。また『補注』に「頓、音鈍、不利也」とある。

太阿 宝剣の名。秦・李斯「上書秦始皇」（『史記』卷八七・李斯列伝）に、「今陛下致昆山之玉、有隨和之寶、垂明月之珠、服太阿之劍」とある。前掲した楚辞「七諫」諷諫・乱辞の句も参照。

9 驥垂兩耳兮 驥は両耳を垂れ

王逸注 雄俊佯愚、閉口目也。（雄俊は愚を佯り、口目を閉ずるなり。）

10 中坂蹉跎 中坂に蹉跎たり

王逸注 衆無知己、不盡力也。（衆に知己無く、力を尽くさざるなり。）

通釈 駿馬は両耳を垂れ、駿馬は両耳を垂れ、坂の半ばで足を躓かせる。

驥垂兩耳 駿馬が重用されず落胆するさま。前漢・賈誼「弔屈原文」（『史記』卷八四・屈原賈生列伝）に「驥垂兩耳兮服鹽車」の表現をそのまま襲ったもの。

中坂 「中阪」に同じ。坂の途中。宋玉「高唐賦」（『文選』卷十九）に「中阪遙望、玄木冬榮」、李善注に「中阪之中、猶未至山頂」。

蹉跎 足を踏み外し転ぶさまを表す疊韻語。力を出し切れず終わってしまうことを言う。『広雅』積訓に「蹉跎、失足也」とある。

11 蹇驢服駕兮 蹇驢 駕に服し

王逸注 駑鈍之徒、爲輔翼也。（駑鈍の徒をば、輔翼と為すなり。）

12 無用日多 無用 日々多し

王逸注 僮蒙並進、填滿國也。（僮蒙並べて進み、国に填滿するなり。）

通釈 あしなえの驢馬が車を引き、役に立たないものが日々あふれている。

蹇驢 足の悪い驢馬。下句の「無用」に通じて、役に立たないものを喩える。前漢・賈誼「弔屈原文」（『史記』卷八四・屈原賈生列伝）に「騰駕罷牛兮蹇蹇驢」、楚辞「七諫」諷諫に

「駕蹇驢而無策兮、又何路之能極」とある。

日多 日々増えていくこと。『管子』形勢解に「人主猶日月也。群臣多姦立、私以擁蔽主、則主不得昭察其臣下、臣下之情、不得上通、故姦邪日多、而人主愈蔽」、楚辞「七諫」怨世に「清泠泠而殲滅兮、溷湛湛而日多」とある。

13 修潔處幽兮 修潔 幽に処り

王逸注 執履清白、居陋側也。（清白を執履するものは、陋側に居るなり。）

14 貴寵沙劓 貴寵は沙劓たり

王逸注 權右大夫、佯不識也。（權右大夫は、識らざると佯るなり。）

通釈 身を修め清めた者は深い場所に身を置き、貴顕の人々はその存在を一切無視する。

押韻 歌部平声（嗟・磋・柯・和・阿・跖・多・劓）

修潔 修絜と同じ。身を修め清らかにする人物。『荀子』賦篇に「此夫安寬平而危險隘者邪、修潔之爲親、而雜汙之爲狄者邪」、『韓非子』八説篇に「人君之所任、非辯智則修潔也」とある。

處幽 奥深く人知れぬのところに身を置くこと。楚辞作品に頻見する語彙である。楚辞「九歌」山鬼に「余處幽篁兮終不見天、路險難兮獨後來」、「九章」抽思に「路遠處幽、又無行媒兮」、「九章」懷沙に「玄文處幽兮、矇眵謂之不章」とある。

貴寵 君主に寵愛される貴人。

沙劓 「抹殺」と同じく、一掃するさまをあらわす疊韻語。『疏証』は「末殺之乙」とする。『今訳』は「沙劓」をすり寄る態度とみなし、權貴寵臣が君主に親近すること（權貴寵臣卻能親近國君）とする。

15 鳳皇不翔兮 鳳皇は翔ばず

王逸注 賢智隱處、深藏匿也。（賢智は隱処し、深く藏匿するなり。）

16 鶉鴒飛揚 鶉鴒は飛揚す

王逸注 小人得志、作威福也。（小人は志を得て、威福を作すなり。）

通釈 鳳皇は飛ばず、うずらが飛翔する。

押韻 陽部平声（翔・揚）。

鳳皇 伝説上のおおとり。君子の比喩となる。鳳皇が他の小鳥と対比的に挙げられる例は楚辞作品に頻出する。「九章」涉江に「鶯鳥鳳皇、日以遠兮。燕雀烏鵲、巢堂壇兮」、「九章」懷沙に「鳳皇在笱兮、雞雉翔舞」、「七諫」怨世に「梟鴞並進而俱鳴兮、鳳皇飛而高翔」とある。

鶉鴒 小鳥。うずら。小人を喩える。『急就篇』巻四に「鳳爵鴻鵠鴈鶩雉、……鳩鴒鶉鴒中網死」、楚辞「哀時命」に「爲鳳皇作鶉籠兮、雖翕翅其不容」とある。

17 乘虹馱蜺兮 虹に乗り蜺を馱とし

王逸注 託駕神氣、而遠征也。（神氣に託駕して、而して遠征するなり。）

18 載雲變化 雲に載りて変化す

王逸注 陞高去俗、易形貌也。（高きに陞りて俗を去り、形貌を易うるなり。）

通釈 虹に乗り蜺を副え馬にし、雲に乗って変化する。

乘虹 虹を馬車に仕立ててて騎乗すること。

馱蜺 「蜺」は「霓」に同じく、にじを表す。「馱蜺」はその「蜺」を車の副え馬とするこ

と。楚辞「九弁」に「驂白霓之習習兮、歷群靈之豐豐」とある。

載雲 楚辞「離騷」に「駕八龍之婉婉兮、載雲旗之委蛇」とあるように、楚辞作品では「載雲旗（雲旗を建てる）」という表現がしばしば見える（「九歌」少司命・東君、「遠遊」、「九弁」等）が、ここでは文字通り雲に乗ることをいうのであろう。前漢・司馬相如「大人賦」（『史記』卷一一七・司馬相如列伝）に「垂絳幡之素蜺兮、載雲氣而上浮」とある。

變化 王逸注に拠れば世俗から天上へと立ち去って、姿形を變化させることを言う。西晋・張敏「神女賦」（『藝文類聚』卷七九・靈異部・神）に「乘雲霧而變化、遙棄我其焉如」とある。

19 鷓鴣開路兮 鷓鴣 路を開き

王逸注 仁士智鳥、導在前也。（仁士智鳥、導きて前に在るなり。）

20 後屬青蛇 後に青蛇を属う

王逸注 介虫之長、衛惡姦也。（介虫の長、惡姦を衛ぐなり。）

通釈 焦明が露払いとなり、後ろに青蛇を付き従える。

開路 王逸注に「導在前也」とあるように、露払いとなって先導すること。

鷓鴣 「焦明」に同じ。鳳凰の類。前漢・司馬相如「上林賦」（『史記』卷一一七）に「然後揚節而上浮、陵驚風、歷駭飈、乘虛無、與神俱。……拂鸞鳥、捎鳳皇、捷鴛雛、掩焦明」とあり、劉宋・裴駟『史記集解』に「焦明似鳳」とある。また楚辞「九歎」遠遊に「駕鸞鳳以上遊兮、從玄鶴與鷓鴣明」とある。

後屬 後ろにつきしたがえること。楚辞「離騷」に「前望舒使先驅兮、後飛廉使奔屬」とある。

青蛇 青色の蛇だが、異界の存在という意を含む。『山海經』大荒北経に「有大人之國、鼈姓、黍食、有大青蛇、黃頭、食塵」とある。

21 步驟桂林兮 桂林を歩し

王逸注 馳逐正道、德香芬也。（正道を馳逐するに、德香芬なり。）

22 超驤卷阿 超えて卷阿に驤がる

王逸注 騰越曲阜、過阨難也。（曲阜を騰越し、阨難を過るなり。）

通釈 桂の林に歩を進め、うねうねと連なる山並みを越えて上がっていく。

步驟 ゆったり歩いたり、逆にすばやく走ったりすること。『荀子』礼論篇に「故君子上致其隆、下盡其殺、而中處其中。步驟馳騁厲驚不外是矣」とある。

桂林 桂の木からなる林。『新序』雜事五に「（宋玉曰）子獨不見夫玄媛乎、當其居桂林之中、峻葉之上、從容游戲、超騰往來、龍興而鳥集、悲嘯長吟」、前漢・司馬相如「上林賦」（『史記』卷一一七）に「徑乎桂林之中、過乎泱莽之野」とある。

卷阿 曲がりくねる大いなる丘。『詩経』大雅・卷阿に「有卷者阿、飄風自南」、毛伝に「卷、曲也」、鄭箋に「大陵曰阿。有大陵卷然而曲」とある。

超驤 飛び上がり進むさま。後漢・張衡「思玄賦」（『文選』卷十五）に「僕夫儼其正策兮、八乘騰而超驤」、呂延濟注に「驤、舉也」とある。

23 丘陵翔舞兮 丘陵は翔舞し

王逸注 山丘踴躍、而歡喜也。（山丘は踴躍して、歡喜するなり。）

24 谿谷悲歌 谿谷は悲歌す

王逸注 川瀆作樂、進五音也。（川瀆は樂を作し、五音を進むるなり。）

通釈 山や丘は飛び上がり舞い踊り、谿谷は悲しい声で歌う。

翔舞 「翔舞」に同じく飛翔し舞踊すること。『補注』が「翔舞、亦丘陵之勢也」というように、「丘陵」の活力に充ちたさまを擬人的に表現したもの。楚辞「九章」懷沙に「鳳皇在笱兮、雞鶩翔舞」とある。

悲歌 悲壮な声で歌を唱い、気持ちを高ぶらせること。これも『補注』が「悲歌、亦謂水聲」というように、「谿谷」に響く音声をこの語で擬人法的に表現する。『史記』卷七・項羽本紀に「於是項王乃悲歌愴慨」、同卷一二九・貨殖列伝に「(中山)丈夫相聚游戲、悲歌愴慨」とある。

25 神章靈篇兮 神章 靈篇

王逸注 河圖洛書、緯讖文也。(河図洛書、緯讖の文なり。)

26 赴曲相和 曲に赴きて相和す

王逸注 宮商並會、應琴瑟也。(宮商並べて会し、琴瑟に応ずるなり。)

通釈 丘陵や谿谷の神妙なる篇章は、それぞれの発する音曲に沿って美しいハーモニーを奏でる。

神章靈篇 「靈篇」は後漢・班固「東都賦」(『文選』卷一)に「啓靈篇兮披瑞圖、獲白雉兮效素鳥」、呂延濟注に「靈篇、即瑞圖也」とあり、王逸注も「神章」と併せて『河圖』『洛書』などの瑞祥について記した緯書の類を指すとする。しかしこうした解釈は後漢期に流行した讖緯思想の影響が濃厚であり、前漢期の作品の解釈としてはややそぐわない。文脈から見て、23・24句で描かれた丘陵や谿谷のパフォーマンスをかく表現したものと解したい。

赴曲相和 それぞれの出す音声に合わせてハーモニーを奏でること。宋玉「高唐賦」(『文選』卷十九)に「更唱迭和、赴曲隨流」、李善注に「赴曲者、鳥之哀鳴、有同歌曲、故言赴曲。隨流者、隨鳥類而成曲也」とある。

27 余私娛茲兮 余私かに茲れを娛しむ

王逸注 我誠樂此、發中心也。(我誠に此れを楽しみ、中心より発するなり。)

28 孰哉復加 孰か復た加えん

王逸注 天下歡悅、莫如今也。(天下の歓悦すること、今に如くは莫きなり。)

通釈 私はひとしれずそれを楽しむ。誰もこれにつけ加えられまい。

29 還顧世俗兮 還って世俗を顧みるに

王逸注 回視楚國及衆民也。(楚国及び衆民を回視するなり。)

30 壞敗罔羅 壞敗し罔羅あり

王逸注 廢棄仁義、修諂諛也。(仁義を廢棄し、諂諛を修むるなり。)

通釈 振り返って世俗を見ると、道徳が崩れ破れて法網がきつく広く張られている。

還顧 振り返りみること。楚辞「九歎」憂苦に「思念郢路兮、還顧睠睠」、「九歎」思古に「曾哀悽歎心離離兮、還顧高丘泣如灑兮」とある。

世俗 時俗、世間を指す語で、楚辞作品に頻見する。「離騷」に「謇吾法夫前脩兮、非世俗之所服」、「漁父」に「安能以皓皓之白、而蒙世俗之塵埃乎」、「惜誓」に「方世俗之幽昏兮、眩白黑之美惡」とある。

壞敗 くずれやぶれること。前漢・賈誼「旱雲賦」(『古文苑』卷三)に「時俗殊而不還兮、恐功久而壞敗」とある。

罔羅 網羅に同じ。鳥獸を捕捉するあみ。『疏証』が「罔羅、喩法度峻嚴」というように、法

律が厳しく、そして広く張り巡らされることを比喻する。楚辞「哀時命」に「蛟龍潜於旋淵兮、身不挂於罔羅」とある。

31 卷佩將逝兮 佩を巻きて將に逝かんとするに

王逸注 祛衣束帶、將横奔也。（衣を祛げ帯を束ねて、將に横奔せんとするなり。）

32 涕流滂沱 涕流れて滂沱たり

王逸注 思君念國、泣霑衿也。（君を思い國を念じ、泣 襟を霑すなり。）

通釈 帯飾りを巻き上げて旅立とうとすると、涙がはらはらと流れる。

押韻 歌部平声（化・蛇・阿・歌・和・加・羅・沱）。

卷佩 おびかざりを巻き上げる。王逸注が「祛衣束帶」というように、身なりを整えることをいう。

滂沱 「滂沱」に同じ。涙がはらはらと流れ落ちるさま。『詩經』陳風「沢陂」に「寤寐無爲、涕泗滂沱」、「九歎」惜賢に「丁時逢殃可奈何兮、勞心悁悁涕滂沱兮」とある。

「乱曰」

題解

「九懷」作品の総括及び、そこで描かれたさまざまな遠遊の帰結として、この乱辞部分では帝舜との邂逅を描く。舜の元に招かれ、その業績を幾つか上げた後、最後にその輔臣となりたいという舜への賛美と愛慕の情を述べて、作品全体を締め括る。

1 皇門開兮 皇門開き

王逸注 王門啓闢、路四通也。（王門開闢し、路四通するなり。）

2 照下土 下土を照らす

王逸注 鏡覽幽冥、見萬方也。（幽冥を鏡覽し、万方を見るなり。）

通釈 天門が開き、光が下土を照らす。

皇門開 「皇門」は天帝の門。郊祀歌十九章「天門」（『漢書』卷二二・礼樂志）に「天門開、諶蕩蕩、穆並騁、以臨饗」とある。

照下土 天上の光が地上へ注いで照らすこと。『詩經』邶風「日月」に「日居月諸、照臨下土」、小雅「小明」に「明明上天、照臨下土」とある。

3 株穢除兮 株の穢れしもの除かれ

王逸注 邪惡已消、遠逃亡也。（邪惡已に消え、遠く逃亡せしむるなり。）

4 蘭芷覩 蘭芷 覩る

王逸注 俊又英雄、在朝堂也。（俊又英雄、朝堂に在るなり。）

通釈 汚れた株は除かれてしまい、蘭芷が見える。

株穢 穢れた切り株。「蘭芷」と対比することで小人の姿を象徴する。楚辞「哀時命」に「概塵垢之枉攘兮、除穢累而反真」、「九思」憫上に「叢林兮窸窣、株榛兮嶽嶽」とある。

覩蘭芷 「覩」は「睹」に同じ。視界に入ること。『周易』乾卦に「聖人作而萬物覩」とある。「蘭芷」は蘭草と白芷という香草の取り合わせ。君子や賢人を象徴する。楚辞「離騷」に「蘭芷變而不芳兮、荃蕙化而爲茅」、「七諫」沈江に「明法令而修理兮、蘭芷幽而有芳」とある。

5 四佞放兮 四佞放たれ

王逸注 驩共苗鯀、竄四荒也。（驩・共・苗・鯀は、四荒に竄せらるるなり。）

6 後得禹 後 禹を得たり

王逸注 乃獲文命、治江河也。（乃ち文命を獲、江河を治せしむるなり。）

通釈 四人の凶悪なものは放逐され、その後、禹を得た。

四佞 「四凶」と同じく、堯舜期の悪名高い四人の人物、共工・驩兜・三苗・鯀を指す。舜によって、地方に追放された。『尚書』舜典に「（舜）流共工於幽洲、放驩兜於崇山、竄三苗於三危、殛鯀於羽山」とあり、『漢書』卷二七上・五行志上に「故堯舜舉群賢而命之朝、遠四佞而放諸疋」、唐・顔師古注に「四佞、即四凶也」とある。

7 聖舜攝兮 聖舜摂し

王逸注 重華秉政、執紀綱也。（重華 政を秉り、紀綱を執るなり。）

8 昭堯緒 堯緒を昭らかにす

王逸注 著明唐業、致時雍也。（唐業を著明にし、時雍を致すなり。）

通釈 舜が摂政をして、帝堯の事業を明らかにする。

聖舜攝 舜が国政を代行すること。『史記』卷一・五帝本紀に「於是帝堯老、命舜攝行天子之政、以觀天命。」とある。

堯緒 堯の事業。『尚書大伝』略説篇に「舜者、推也、循也。言其推行道德、循堯緒也」とある。

9 孰能若兮 孰か能く^{かくのごと} 若くならんや

王逸注 誰能知人、如唐虞也。（誰か能く人を知ること、唐虞の如くならんや。）

10 願爲輔 願わくば輔と為らん

王逸注 思竭忠信、備股肱也。（忠信を竭くし、股肱に備わらんと思うなり。）

通釈 だれがこのようにできようか。できればその支えとなりたいものだ。

押韻 魚部上声（土・觀・禹・緒・輔）。

孰能若 だれも帝舜のようにはできないことを反語的に言う。『左伝』襄公二九年に「爲之歌唐（風）。（呉季札）曰、思深哉。其有陶唐氏之遺民乎。不然、何憂之遠也。非令德之後、誰能若是」とある。

爲輔 補臣となること。『荀子』成相篇に「（禹）得益・皋陶・橫革・直成、爲輔」とある。